

關於江淹「遂古篇」的考察 ——以與郭璞《山海經》注之關係爲中心——

松 浦 史 子

在與《山海經》有關的六朝文學作品中 例來以郭璞《山海經圖贊》和陶淵明《讀山海經》著稱,但高橋和己氏指出:六朝末期的詩人江淹在遊仙詩方面繼承了郭璞。筆者還注意到:在《南史》〈江淹傳〉未有記載說 江淹爲了補《山海經》之缺「嘗欲爲《赤縣經》以補《山海》之缺 竟不成。」這一記錄在迄今爲止的《山海經》研究中幾乎沒有受到重視。如今以《赤縣經》爲名的書藉已無存世 然而《江文通集彙注》之作者明代的胡之驥 把江淹的〈遂古篇〉即看作是《赤縣經》。

本文以江淹〈遂古篇〉爲中心 對迄今被人們所忽視的「江淹與《山海經》的內在關係」進行考察 其結果表明 郭璞《山海經》注曾利用史書中的邊疆志和汲冢書中的記載 試證明《山海經》奇異世界的真實性 而江淹的〈遂古篇〉正是繼承了前者的“實證性注釋精神” 同時又以郭璞所未引用的最新的邊疆志爲資料對《山海經》做了擴充 可以說是志願撰述具有學術意義的著作。另外,江淹的後半生對新傳入的佛教十分熱衷 相比之下 郭璞《山海經》的注釋全無對佛教世界的關心。筆者認爲這些可能是促使江淹對《山海經》世界重新探討的主要原因。

江淹「遂古篇」について

郭璞『山海経』注との関わりを中心に

松浦史子

緒言

六朝後期に活きた詩人江淹（四四四—五〇五）の夢に、六朝初めに活きた詩人郭璞（二七六—三三四）が出現し、「五色の筆」を返還するように求めた、江淹が懐中の「五色の筆」を郭璞に返してからというもの、江淹の溢れんばかりの文才は、ぱったり尽きてしまった、という著名な故事がある。先行の江淹研究では、この「五色の筆」故事成立の背景に、郭璞から江淹へ、遊仙詩風の継承関係があった事が指摘されている。郭璞といえば、『山海経』の最古の注釈者としても名高いが、郭璞の死後、百二十年ののち、一方の江淹が『山海経』の闕を補う目的で、『赤泉経』なる書物を手掛けたという史伝については、これまでの『山海経』受容史に於いても、殆ど注目されてこなかった。

その注目すべき史実は、今、『南史』「江淹伝」に、「嘗て『赤泉経』を為りて以て、『山海』の闕を補わんと欲するも、竟に成らず」という一文に伝えられている。現在、『赤泉経』という名称の書物は伝わらないものの、江淹の著作に關する最古の集注本『江文通集彙注』の著者である明の胡之驥は、「遂古篇」なる作品を『赤泉経』の内容を彷彿と

江淹「遂古篇」について

させる作品として特に注目し、詳注を施している。確かに、「遂古篇」は、現存する江淹の作品のなかでも『山海経』中の往古と域外の時空を最も色濃く反映した作品であり、失われた『赤梟経』に代わり、江淹の『山海経』補闕作業をうかがわせるに足るものである。よって本稿では、当作品の検討を通じて、『山海経』をめぐる、江淹と郭璞の間にとどのような関わりがあったかを考察する。これはまた、従来、『山海経』の研究では空白とされてきた、六朝後期における『山海経』受容の一形態を明らかにする試みでもある。

1、郭璞と江淹の『山海経』世界

「天下第一の奇書」と称される『山海経』は、その成立年代・地域を巡って未だに諸説紛々であるが、前漢代までに成立した神話的地誌であるという点では概ね一致を見ている。歴代の評価も様々だが、中でも漢の司馬遷が『山海経』を虚妄の書とした評は著名である。こうした酷評に対し、『山海経』に伝えられる世界の实在を説かんとし、この奇書に対して初めて本格的に注釈を加えたのが、六朝東晋に現れた博物学者・郭璞であった。郭璞、字は景純。陰陽曆数に長け、神秘の世界に通じたと伝えられる郭璞は、「遊仙詩」「江賦」等の文学作品で知られるが、膨大な博物学的知識に基づく注釈の業績でも名高い。その注釈の対象には、『爾雅』等の小学類のほか、『山海経』『穆天子伝』『楚辞』といった、正統儒家に属さない神話的内容を持つ書物が多く選ばれた事を特徴とする。

では、郭璞から百二十年のち、六朝宋齊梁の三代を活きた詩人・江淹は、この『山海経』の世界を如何に受容したのだろうか。江淹、字は文通。江淹の文学は、通常、『文選』に所載される模擬的作品や、「別賦」「恨賦」などの叙

情的作品で知られるが、他方、神道教的な興味を伴いつつ、虹や鉾物などの奇異で神秘的な事象を詠んだ作品も少なくない。こうした江淹の神秘嗜好に着目したのは、日本では高橋和巳氏（一九六八）、中国では曹道衡氏による論究（一九八四）が早い（前掲脚注二）。両氏は共に、先述の「五色の筆」故事成立の背景として、郭璞から江淹へ遊仙詩風の継承関係のあったことを指摘しているが、そこに『山海経』世界との関わりについての言及はない。他方、黒田真美子氏は、郭璞の遊仙詩に『山海経』的描写のある事を指摘した興膳宏氏の郭璞研究（一九六四）を手がかりに、江淹の神秘的な叙景詩にも郭璞の『山海経』的描写法に似た特徴が見られる事に着目し、こうした江淹の特色を示す作品として「赤虹賦」を採り上げている。しかし、氏の論考は主に色彩語の検討にとどまり、これらの作品が江淹において持つ意味は充分考察はされていない（二一）。これに対し、筆者はかつて、科学者の様な目で虹や本草鉾物などの珍奇な物象を観察・描写する姿勢こそは、江淹文学の中核をなす重要な特徴である事を指摘し、江淹のこうした嗜好が神道教への強い興味と相俟って、『山海経』の記述を實在のものとして探求する郭璞の『山海経』世界観を継承発展させたことを論じた（二二）。

本稿は、「遂古篇」を通して、江淹と『山海経』との関わりをさらに明らかにする試みである。まず、郭璞と江淹の『山海経』世界への興味には、その基礎に共通する資質や業績のある事に着目したい。それを、汲冢書と古字古物愛好、史書の編纂という、二つの事項に確認してみよう。

1 1、『山海経』と汲冢書 及び古字古物愛好

『山海経』世界の实在を主張する際に、郭璞が、特に重要な論拠として注釈に大量に引用したのが、いわゆる汲冢書であった。汲冢書とは、晋の御代、汲縣にある襄王の墓から出土した大量の竹簡の事である。忽然と開かれた往古への扉に、当時の学界は騒然とした。そのうち『穆天子伝』『竹書紀年』は、『山海経』の内容と重なっていたため、郭璞は、これらを『山海経』の信憑性を主張する重要な論拠として注釈に多く引用している⁹。汲冢書はまた古代の科斗文字で書かれていた。古墓から突如出現した古代文字躍るこの汲冢書が、古文字愛好の伝えられる郭璞の情熱を駆り立てたであろうことは想像に難くない¹⁰。さらに、汲冢からは古簡と共に古の銅劍が出土しているが、郭璞は、それを古書『尸子』に伝えられる名劍の存在が証明された例として、『山海経図讚』『赤銅讚』に讚している¹¹。

一方、江淹の文学にも汲冢書を素材とする作品が少なくなく、汲冢書の描く世界への高い関心が認められるものの、従来の江淹研究では、『彙注』『校注』に注釈として引用があるのに留まり¹²、汲冢書世界が江淹文学において持つ意味の検討はなされていない。これに対し、本稿で新たに注目するのは、江淹の汲冢書受容の土壌には、郭璞同様の古字古物愛好が認められることである。例えば、『南史』『江淹伝』の記載からは、江淹が汲冢書に用いられる科斗文字のある程度理解出来たことが看取される¹³。また、江淹には、旧宮の近くから古の銅劍が出土した際、知人からその真偽を問われ、該博な知識を以て往古の銅兵器文化の存在を説く「銅劍讚」という風変わりな作品があるが、その冒頭にまず述べるのが、『山海経』の「赤銅」の記載とその郭璞注なのである¹⁴。そこには『尸子』や『越絶書』、汲

冢書『逸周書』等の古書に伝えられる古の名銅劍への言及とともに、郭璞『山海経図讚』にも讃じられる汲冢出土の古銅劍への言及が見えている。かくて、江淹が、古墓から出土した古の銅劍の奇異なることに感動し、真つ先に想起したのが郭璞『山海経』注であった事は、江淹の『山海経』受容の性質を考える上で極めて示唆に富むものである。江淹より遡ること百二十年の昔、汲冢から出土した古劍を得て、郭璞は往古の世界が実証されたとその喜びを語った。「銅劍讚」の筆を執っていたときの江淹が、郭璞とのアナロジーを実感したことはほぼ間違いない。「銅劍讚」の冒頭の記述は、古物を目にした江淹の胸の高鳴りを生き活きと伝えるのである。

「銅劍讚」には、また、往古の銅兵器文化の存在を証明せんとして、江淹が呉興（今の福建省）に左遷されていた折（三十一〜三十四才迄）に、自ら目にした古の銅箭鏑や銅斧などに就いて言及する詩句もある¹⁵。このように、古の世界が眼前に存在するモノによって、証明されていくことに興を覚える江淹の感性には、『江文通集』「自序」に自ら「愛奇尚異」と表白する、「奇異」なる事象に対する愛好を指摘すべきである¹⁶。また、以前、拙稿でも指摘したように（二）（二）、こうした奇異なる事象への生来の嗜好は、天文地理・本草鉱物という自然の産む珍奇で神秘的な事象を詠題とすることに於いて、江淹文学が通史的・同時代的にみても突出した存在であることによっても傍証されるのである。この点を、郭璞に通じる資質として、かつまた、江淹を『山海経』に向かわせた大きな動因として、ここで再度確認しておきたい。

1 2、『山海経』と史書 江淹『齊史』「十志」の編纂

「遂古篇」本文の検討でも詳述するように、郭璞が『山海経』世界の实在を解くために重要な論拠としたものには、汲冢書に加えて、史書の辺境志があつた。六朝時代に至り、これまで経書の一部であつた史部が独立し、多くの史書が編まれるようになった。その編纂に携わつたのは概ね寒門の士人達であつたが、郭璞もその例に漏れず、『晋史』の編纂を行つて¹⁷いる。

一方、江淹も史家として優れた業績を残しており、中でも特に名高いのが、『齊史』「十志」の編纂である¹⁸。唐の劉知幾『史通』には、この『齊史』編纂の命を受けた江淹が、史書に於いては「志」の編纂が最も難しいと言い、「十志」をまず先に記してその才を現した、との記述が見えて¹⁹いる。『南齊書』「文学・檀超伝」は、その「十志」の具體的内容を、次のように伝えている。

建元二年、初置史官、以超與驃騎記室江淹史職。……立十志・律曆、禮樂、天文、五行、郊祀、刑法、藝文依班固朝會、輿服依蔡邕、司馬彪 州郡依徐爰。百官依范曄、合州郡。班固五星載天文、日蝕載五行；改日蝕入天文志。

【訳】建元二年（四八）、初めて史官を置き、檀超と驃騎記室江淹を史職とした。……十志を立てた；（すなわち）「律曆志」、「禮樂志」、「天文志」、「五行志」、「郊祀志」、「刑法志」、「藝文志」は班固（の『漢書』）に依り、「朝會志」、「輿服志」は蔡邕（の『漢史』²⁰）・司馬彪（の『続漢書』）に依り、「州郡志」は徐爰（の『宋書』）に依り、「百官志」は范曄（の『後漢書』）に依り、「州郡志」とあわせた。班固（の『漢書』）は「五星」を「天文

志」に載せ、「日蝕」を「五行志」に載せるが、『齊史』では「日蝕」を改めて「天文志」に入れた。

『南齊書』「文学・檀超伝」

この『南齊書』の記述と『史通』の記述を併せて判るのは、史書の「志」の編纂には、天文地理・五行などに関する博物的知識が必要であり、江淹はその博学をかわれて「志」の編纂にあたり、高く評価されたという事である。さらに注目すべきは、江淹が、『齊史』の編纂にあたって、概ね漢代を対象とする史書に範を採りつつ、地理志である「州郡志」のみを徐爰の『宋書』に範を採り、最新の地理を把握しようとしている点である。こうした最新の地誌への着目は、後述する江淹の『山海経』補欠作業への動機とも密接に結びつくため、特に留意しておきたい。

以上、江淹と郭璞に於ける『山海経』受容を検討する上で不可欠の、両者に共通する資質や業績について確認した。次に、「遂古篇」の検討を通じて、郭璞の受容した『山海経』を江淹が如何に継承発展させたかを見てみたい。

2、江淹「遂古篇」の検討 郭璞注との関わり

2 1、先行研究とその問題点

これまで江淹「遂古篇」はどのように論じられてきたのだろうか。検討に当たり、まず「遂古篇」が『楚辞』「天問」に倣い、四字句を連ねて天地開闢や神々の世界への疑問を述べる形を採っていること、但し、「天問」とは異なり、疑問句ばかりを連ねたものではないことを確認しておきたい。

先行する評に於いては、こうした『楚辞』「天問」との関わりに加え、「遂古篇」が「篇」の文体を採る韻文である

事などから、これを文学作品として扱う評も少なくない。例えば、王琳氏は、江淹の『楚辞』的な擬古文学を検討する際に引用し（一九八八）、蕭合姿氏は玄言詩の類例の一つとして大要を示している（二一）²¹。一方、その内容は『山海経』に対する補欠と質疑に近いといい、『赤梟経』編纂との関わりを示した『江淹集校注』（前掲注四）では、特に儒仏道三教からの影響を指摘するように、この作品の思想的側面に着目する評もある。このように恐らくその複雑な内容に因って、「遂古篇」への評もまた様々であるが、こつした先行評のうち本稿の内容と大きく関わるものは、「遂古篇」と『楚辞』「天問」との関係を検討した石本道明氏の論究（二一四）²²である。石本氏によれば、「遂古篇」は「天問」を継承するものとは言えず、江淹は自身の神秘趣味の発露の手段として「天問」を用いるだけであるという。「天問」の継承を否定する根拠の一つとして、石本氏は「遂古篇」で発せられる江淹の造化への疑問は、「天問」の様に神話世界に対する根源的疑問ではなく、事実の正否を中心とする外面的・形式的なものであると述べ、それは、江淹文学に特徴的な感傷性に依るためである、とする。つまり、江淹の感傷的で繊弱な文学的気質ゆえに、「遂古篇」もまた「天問」を継承しえず、神秘的事象の博搜に留まる、というのが石本氏の主張であるが、これには次の二点において疑問がある。

まず、「遂古篇」の成立年代の問題がある。江淹の自選集の変遷を検討した中野将氏に拠れば、『江淹集』²³には、本来、前集と後集とがあり、現行のものは江淹が四十才位迄に編んだ『前集』²⁴に当たるといふ。中野氏は、また、現行の『江淹集』には、本来『後集』所収のものと推測される作品も採録されているとし、それらが思想的な文章や国家に関わる祭祀文など、明らかに前半生の感傷的文学とは質が異なる作品である点を指摘するのだが、注目すべきは、中野氏が「遂古篇」もまた、江淹後半生の作例であるとみなす点である。

江淹の文章の質的变化については、呉興左遷後の身分的变化も恐らく大きく関わっている。江淹は左遷後、三十四才から三十九才迄は蕭道成（齊高帝）に、その後、五十才迄は蕭鸞（後の齊明帝）の下に仕え、一気に官途を上り詰めていくのだが、史書によればこの時期の江淹は、主に、詔策作製や国史編纂に携っている²⁵。「遂古篇」が、左遷から戻った江淹が官僚として詔策や軍令・祭祀文などの国家的文章、或いは思想的文章の執筆に従事した後半生の作品であるとすれば、それが神秘的事象の博搜に留まるとし、その理由に、前半生の江淹文学に特徴的な「感傷性」を推す石本氏の指摘は当を得ないだろう。

さらに二点目として、『山海経』に対する姿勢があげられる。“古・奇・異”なる事象に興味を持つことが、江淹と郭璞に共通する資質である事はすでに述べた通りだが、『山海経』及び郭璞注との関わりから見直すとき、江淹「遂古篇」には、単なる「神秘主義」には留まらない、『山海経』世界への科学的・実証的姿勢が看取されるのである。以下、「遂古篇」本文を読んでその姿勢を確認してみたい。

2 2、 本文検討

「遂古篇」は、内容的には四段落に分かれており、そこに「序文」と結びの「乱」に当たる文が加わった構成となっている。次にその全文を掲げ、要旨を段落毎に示す。（段落の分け方は『校注』に拠る。）

〔江淹「遂古篇」并序全文〕（傍線は本稿でとりあげる箇所。）

僕嘗爲「造化篇」、以學古制令。觸類而廣之、復有此文、兼象「天問」、以遊思云爾。

江淹「遂古篇」について

第一段落聞之遂古、大火然兮。水亦溟泮、無涯邊兮。女媧煉石、補蒼天兮。共工所觸、不周山兮。河洛交戰、寧深淵兮。黃炎共門、涿鹿川兮。女岐九子、爲氏先兮。蚩尤鑄兵、幾千年兮。十日並出、堯之間兮。羿迺斃日、事豈然兮。常娥奔月、誰所傳兮。豐隆騎雲、爲靈仙兮。夏開乘龍、何因緣兮。傳說託星、安得宣兮。夸父鄧林、義亦艱兮。建木千里、烏易論兮。穆王周流、往復旋兮。河宗王母、可與言兮。青鳥所解、路誠亶兮。五色玉石、出西偏兮。崑崙之墟、海此間兮。去彼宗周、萬二千兮。『山經』古書、亂編篇兮。郭釋有兩、未精堅兮。

第二段落上有剛氣、道家言兮。日月五星、皆虛懸兮。倒景去地、出雲烟兮。九地之下、如有天兮。土伯九約、寧若先兮。西方蓐收、司金門兮。北極禺強、爲常存兮。帝之二女、遊湘沅兮。霄明燭光、向焜煌兮。太一司命、鬼之元兮。山鬼國殤、爲遊魂兮。迦維羅衛、道最尊兮。黃金之身、誰能原兮。恒星不見、頗可論兮。其說彬彬、多聖言兮。六合之內、心常渾兮。幽明詭性、令智惛兮。

第三段落河圖洛書、爲信然兮。孔甲養龍、古共傳兮。禹時防風、處隅山兮。春秋長狄、生何邊兮。臨洮所見、又何緣兮。蓬萊之水、淺於前兮。東海之波、爲桑田兮。山崩邑淪、寧幾千兮。石生土長、必積年兮。漢鑿昆明、灰炭全兮。魏開濟渠、螺蚌堅兮。白日再中、誰使然兮。北斗不見、藏何間兮。建章鳳闕、神光連兮。未央鐘簾、生花鮮兮。銅爲兵器、秦之前兮。丈夫衣綵、六國先兮。周時女子、出世間兮。班君絲履、遊太山兮。人鬼之際、有隱淪兮。

第四段落四海之外、孰方圓兮。沃沮肅慎、東北邊兮。長臂兩面、亦乘船兮。東南倭國、皆文身兮。其外黑齒、次裸民兮。侏儒三尺、並爲隣兮。西北丁零、又烏孫兮。車師月支、種類繁兮。馬蹄之國、善騰奔兮。西南烏弋、

及鬪寶兮。天竺于闐、皆胡人兮。條支安息、西海滄兮。人迹所極、至大秦兮。珊瑚明珠、銅金銀兮。瑠璃瑪瑙、來雜陳兮。碑礫水精、莫非真兮。雄黃雌石、出山垠兮。青白蓮花、被水濱兮。宮殿樓觀、並七珍兮。窮隆溟海、又有民兮。長股深目、豈君臣兮。丈夫女子、及三身兮。穿胸反舌、一臂人兮。跂踵交脛、與羽民兮。不死之國、皆何因兮。

茫茫造化、理難循兮。聖者不測、況庸倫兮。筆墨之暇、爲此文兮。薄暮雷電、聊以忘憂、又示君子。

〔第一段落〕、前半では天地開闢と往古の神々の世界の世界が展開され、後半には穆王の西征についての記述がある。

〔第二段落〕、道家的天地構造を述べたあと天地四方の神々を羅列し、後半では仏教の宇宙論などについて述べる。

〔第三段落〕、『河圖洛書』の信憑性を説いたあと、天文や往古の青銅器文化、神仙説などに対する疑問が示される。

〔第四段落〕、異域の国々が羅列され、遠国の異民への言及がある。

本稿では、こうした往古の神々や遠国異民の記述が、『山海經』およびその郭璞注を如何に継承し発展させているかを、以下の三つの論点に沿って検討してみたい。

- 、郭璞注を媒介とすると、一つの相関連する話として纏まってくる例
- 、郭璞同様、史書の情報を以て『山海經』世界の実在を証明しようとする例
- 、郭璞注には用いられない史書の地理誌に基づき、郭璞注の闕を補い拡張させた例

江淹「遂古篇」	史書
四海之外、孰方圓兮	
〔東北の國〕 1 沃沮	<p>, 1 『三國志・魏志』「東夷傳」 「王頎別遣追討宮、盡其東界。問其耆老「海東復有人不」 耆老言國人嘗乘船捕魚、遭風見吹數十日、東得一島、上 有人、言語不相曉、其俗常以七月取童女沈海。又言有一 國亦在海中、純女無男。又說得一布衣、從海中浮出、其 身如中(國)人衣、其兩袖長三丈。又得一破船、隨波出 在海岸邊、有一人項中復有面、生得之、與語不相通、不 食而死。其域皆在沃沮東大海中。」 『後漢書』「東夷傳」</p>
2 肅慎、東北邊兮	<p>『史記』「孔子世家」「司馬相如傳」 , 2 『三國志・魏志』「東夷傳」 「挹婁在夫餘東北千餘里、濱大海、...處山林之間、常 穴居、大家深九梯、以多為好。土氣寒、劇於夫餘。其俗 好養豬、食其肉、衣其皮。冬以豬膏塗身、厚數分、以禦 風寒。...其弓長四尺、力如弩、矢用楛、長尺八寸、青石 為鏃、古之肅慎氏之國也。善射、射人皆入(因)[目]、 矢施毒、人中皆死。出赤玉、好貂、今所謂挹婁貂是也。」 『漢書』「五行志」他 『後漢書』「東夷傳」他</p>
3 長臂	<p>3 『三國志・魏志』「東夷傳」 「王頎別遣追討宮、盡其東界。...其兩袖長三丈。...其域 皆在沃沮東大海中。」(沃沮の項参照)</p>
4 兩面、亦乘船兮。	<p>, 4 『三國志・魏志』「東夷傳」 「王頎別遣追討宮、盡其東界。...又得一破船、隨波出在 海岸邊、有一人項中復有面、生得之、與語不相通、不食 而死。其域皆在沃沮東大海中。」(沃沮の項参照)</p>

『山海經』本文・郭璞注・江淹「遂古篇」・史書・対照一覧表
 附表 東北の国

江淹「遂古篇」について

『山海經』本文	郭璞注
×	<p>「大荒西經」「女子國」郭璞注 「(『東夷傳』曰)王頎至沃沮國、盡東界、問其耆老、云；『國人嘗乘船捕魚遭風、見吹數十日、東一國、在大海中、純女無男。』、即此國也。」 「大荒西經」「三面國」郭璞注(兩面の項参照) 「海外南經」「長臂國」郭璞注(長臂の項参照)</p>
<p>「大荒北經」「大荒之中、有山、名曰不咸。有肅慎氏之國。」 「海外西經」「肅慎之國、在白民北」</p>	<p>「(『東夷傳』曰)今肅慎國去遼東三千餘里、穴居、無衣、衣豬皮、冬以膏塗體、厚數分、用卻風寒。其人皆工射、弓長四尺、勁彊。箭以楛爲之、長尺五寸、青石爲鏃。...今名之爲挹婁國、出好貂、赤玉。豈從海外轉而至此乎。」 「其俗無衣服、中國有聖帝代立者、則此木生皮可衣也。」</p>
<p>「海外南經」「長臂國在其東、捕魚水中、兩手各操一魚。」</p>	<p>「舊説云、其人手下垂至地。(『東夷傳』曰)魏黃初中、玄菟太守王頎討高句麗王宮、窮追之、過沃沮國、其東界臨大海、近日之所出。問其耆老、海東復有人否？云：嘗在海中得一布褐、身如中人、衣兩袖長三丈、即此長臂人衣也。」 郭璞『注山海經序』「王頎訪兩面之客、海民獲長臂之衣、精驗潛效、絕代縣符。」 * 『山海經圖讚』「長臂國」</p>
<p>「大荒西經」「有人焉三面、是顓頊之子、三面一臂、三面之人不死、是謂大荒之野。」</p>	<p>「言人頭三邊各有面也。(『東夷傳』曰)玄菟太守王頎至沃沮國、問其耆老、云；『復有一破船、隨波出在海岸邊、上有一人、頂中復有面、與語不解、了不食而死。』、此是兩面人也。」 郭璞『注山海經序』「王頎訪兩面之客、海民獲長臂之衣、精驗潛效、絕代縣符。」</p>

江淹「遂古篇」	史書
<p>【東南の國】</p> <p>5 東南倭國、皆文身兮</p>	<p>『漢書』「地理志」 ⁵ 『三國志・魏志』「東夷傳」「倭人在帶方東南大海之中、依山島為國邑。...男子無大小皆鯨面文身。...夏后少康之子封於會稽、斷髮文身以避蛟龍之害。今倭水人好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以為飾。以朱丹塗其身體、如中國用粉也。...其俗、國大人皆四五婦、下戶或二三婦。婦人不滯、不妬忌。」 『後漢書』「東夷傳」</p>
<p>6 其外黑齒</p>	<p>⁶ 『三國志・魏志』「東夷傳」「女王國東渡千餘里、復有國、皆倭種。又有侏儒國其南、人長三四尺、去女王四千餘里。又有裸國、黑齒國復在其東南、船行一年可至。」 『後漢書』「東夷傳」</p>
<p>7 次裸民兮。</p>	<p>『史記』「南越尉佗列傳」他 ⁷ 『三國志・魏志』「東夷傳」「女王國東渡千餘里、復有國、皆倭種。又有侏儒國其南、人長三四尺、去女王四千餘里。又有裸國、黑齒國復在其東南、船行一年可至。」 『後漢書』「東夷傳」</p>
<p>8 侏儒三尺、並為隣兮</p>	<p>『史記』「滑稽列傳」他 『漢書』「司馬相如列傳」 ⁸ 『三國志・魏志』「東夷傳」「女王國東渡千餘里、復有國、皆倭種。又有侏儒國其南、人長三四尺、去女王四千餘里。又有裸國、黑齒國復在其東南、船行一年可至。」 『後漢書』「李恂傳」</p>
<p>【西北の國】</p> <p>9 西北丁零、</p>	<p>『史記』「匈奴列傳」 『漢書』「匈奴傳」 ⁹ 『魏略』「西戎傳」「北丁令在烏孫西、似其種別也。」 『又匈奴北有渾窳國...明北海之南自復有丁零、非此烏孫之西丁零也。』 『後漢書』「烏桓鮮卑列傳」</p>
<p>10 又烏孫兮。</p>	<p>『史記』「大宛傳」 『漢書』「西域傳」 ¹⁰ 『魏略』「西戎傳」(丁零の項参照) 『後漢書』「西域傳」「南匈奴傳」他</p>
<p>11 車師</p>	<p>『漢書』「西域傳」 ¹¹ 『魏略』「西戎傳」「南去車師六國五千里。」 『後漢書』「西域傳」</p>
<p>12 月支、種類繁兮。</p>	<p>『史記』「大宛傳」 『漢書』「西域傳」 ¹² 『魏略』「西戎傳」「燉煌西域之南山中...有月氏餘種葱茈羌、白馬、黃牛羌、各有酋豪、北與諸國接、不知其道理廣狹。」 『後漢書』「西域傳」</p>
<p>13 馬蹄之國、善騰奔兮</p>	<p>¹³ 『魏略』「西戎傳」「烏孫長老言北丁零有馬脛國、其人音聲似雁鶩、從膝以上身頭、人也、膝以下生毛、馬脛馬蹄、不騎馬而走疾馬、其為人勇健敢戰也。」</p>

附表 東南・西北の国

江淹「遂古篇」について

『山海經』本文	郭璞注
「海内北經」「倭屬燕。」	<p>「『東夷傳』曰、倭國在帶方東大海内、以女爲主、其俗露紒、衣服無針功、以丹朱塗身、不妒忌、一男子數十婦也。」</p> <p>「海外東經」「黑齒國」郭璞注</p> <p>「『東夷傳』曰、倭國東四十餘里、有裸國、裸國東南有黑齒國、船行一年可至也。」</p>
<p>「大荒東經」「有黑齒之國。帝俊生黑齒、姜姓、黍食、使四鳥。」</p> <p>「海外東經」「黑齒國在其北、爲人黑、食稻啖蛇、一赤一青、在其旁。」</p>	<p>「齒如漆也」</p> <p>「『東夷傳』曰、倭國東四十餘里、有裸國、裸國東南有黑齒國、船行一年可至也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「黑齒國兩師妾糸股國勞民國。」</p>
<p style="text-align: center;">×</p>	<p>「海外東經」「黑齒國」郭璞注</p> <p>「『東夷傳』曰、倭國東四十餘里、有裸國、裸國東南有黑齒國、船行一年可至也。」</p>
<p>「海外南經」</p> <p>A 「周饒國在其東、其爲人短小、冠帶。」</p> <p>B 「一曰焦僥國在三首東。」</p>	<p>A 「其人長三尺、穴居、能爲機巧、有五穀也。」</p> <p>B 「『外傳』云、「焦僥民長三尺、短之至也。」</p> <p>『詩含神霧』曰、「從中州以東西四十萬里、得焦僥國人、長尺五寸」也。」</p> <p>「海外北經」「跂踵國」郭璞注</p> <p>「『孝經鉤命訣』曰、焦僥跂踵、重譯款塞也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「焦僥國。」</p>
<p>「海内經」「有釘靈之國、其民從叡已下有毛、馬蹏善走。」</p>	<p>「『詩含神霧』曰、馬蹏自鞭其蹏、日行三百里。」</p>
<p style="text-align: center;">×</p>	<p style="text-align: center;">×</p>
<p style="text-align: center;">×</p>	<p style="text-align: center;">×</p>
<p>「海内東經」「國在流沙外者、大夏、豎沙、居繇、月支之國。」</p>	<p>「月支國好多馬、美果、有大尾羊如驢尾、即羴羊也。小月支、天竺國皆附庸云。」</p> <p>「西山經」「羴羊」郭璞注</p> <p>「今大月氏國有大羊如驢而馬尾。」</p>
<p>「海内經」「有釘靈之國、其民從叡已下有毛、馬蹏善走。」</p>	<p>「『詩含神霧』曰、馬蹏自鞭其蹏、日行三百里。」</p>

江淹「遂古篇」	史書
<p>【西南の國】</p> <p>14 西南烏弋</p>	<p>『漢書』「西域傳」「烏弋山離國、王去長安萬二千二百里。...東與罽賓、北與撲挑、西與犁軒、條支接。行可百餘日、乃至條支。國臨西海。...安息長老傳聞條支有弱水、西王母、亦未嘗見也。」</p> <p>14 『魏略』「西戎傳」「自是以西、大宛、安息、條支、烏弋。烏弋一名排特、此四國次在西、本國也、無增損。」</p> <p>14 『後漢書』「西域傳」「德若國...歷罽賓、六十餘日行至烏弋山離國」</p>
<p>15 及罽賓兮。</p>	<p>同上</p>
<p>16 天竺</p>	<p>『史記』「西南夷列傳」</p> <p>『漢書』「西南夷兩粵朝鮮傳」「西域傳」(身毒)</p> <p>16 『魏略』「西戎傳」「罽賓國、大夏國、高附國、天竺國皆并屬大月氏。」</p> <p>『後漢書』「西域傳」「天竺國一名身毒、在月氏之東南數千里。...土出象、犀、瑇瑁、金、銀、銅、鐵、鉛、錫、西與大秦通、有大秦珍物。」(天竺</p>
<p>17 于闐、皆胡人兮</p>	<p>『史記』「大宛傳」</p> <p>『漢書』「西域傳」「其河有兩原、一出葱嶺山、一出于闐。于闐在南山下、其河北流、與葱嶺河合、東注蒲昌海。蒲昌海、一名鹽澤者也。」</p> <p>『魏略』「西戎傳」</p> <p>17 『後漢書』「西域傳」「于真國居西城、...德若國...歷罽賓、六十餘日行至烏弋山離國」</p>
<p>18 條支</p>	<p>『漢書』「西域傳」(烏弋の項参照)</p> <p>18 『魏略』「西戎傳」「大秦國一號犁軒在安息條支西。大海之西。」</p> <p>『後漢書』「西域傳」</p>
<p>19 安息、西海濱兮。</p>	<p>『史記』「大宛傳」</p> <p>『漢書』「西域傳」(烏弋の項参照)</p> <p>19 『魏略』「西戎傳」「大秦國一號犁軒在安息、條支西大海之西。」</p> <p>19 『後漢書』「西域傳」「安息西界極矣。自此南乘海、乃通大秦。其土多海西珍奇異物焉。」</p> <p>『史記』「大宛傳」</p>
<p>20 人迹所極、至大秦兮。</p> <p>珊瑚明珠、銅金銀兮。 瑠璃瑪瑙、來雜陳兮。 碑磔水精、莫非真兮。 雄黃雌石、出山垠兮。 青白蓮花、被水濱兮。 宮殿樓觀、並七珍兮。</p>	<p>『漢書』「西域傳」(犁軒・犁靳)</p> <p>20 『魏略』「西戎傳」「大秦國一號犁軒在安息、條支西大海之西。...西域舊圖云...大秦多金、銀、銅、鐵、鉛、錫、神龜、白馬、朱鬣、駭鷄犀、瑇瑁、玄熊、赤螭、辟毒鼠、大貝、車渠、瑪瑙、南金、翠爵、羽翮、象牙、符采玉、名月珠、夜光珠、真白珠、虎珀、珊瑚、赤白黑綠黃青紺縹紅紫十種流離、瑇瑁、琅玕、水精、玫瑰、雄黃、雌黃、碧、五色玉黃白黑綠紫紅絳金黃縹留黃十種氈氍、...金縷繡、雜色綾、金塗布、緋持布...絳地金織帳、五色斗帳、一微木、二蘇合...」</p> <p>20 『後漢書』「西域傳」「安息西界極矣。自此南乘海、乃通大秦。其土多海西珍奇異物焉。大秦國一名犁鞬、以在海西、亦云海西國。...土多金銀奇寶、有夜光璧、明月珠、駭鷄犀、珊瑚、虎魄、琉璃、琅玕、朱丹、青碧。...凡外國諸珍異皆出焉。」</p> <p>(、 黒字イタリック部分が江淹「遂古篇」の記載に符合</p>

附表 西南の国

江淹「遂古篇」について

『山海経』本文	郭璞注
×	「海内西経」「弱水、青水出西南隅。」郭璞注 「(『漢書』)西域傳、『烏弋國去長安萬五千餘里、西行可百餘日、至條支國、臨西海。長老傳聞、有弱水西王母云。』」
×	×
「海内経」「東海之内、北海之隅、有國名曰朝鮮、天毒、其人水居、俚人愛之。」	「天毒即天竺國、貴道德、有文書、金銀、錢貨、浮屠出此國中。晉太興四年、天竺胡王獻珍寶。」
×	「西山経」「不周之山」郭璞注 「河南出昆侖、潛行地下、至蔥嶺、出于闐國、復分流岐出、合而東流、注渤海。」(前)
×	「海内西経」「弱水、青水出西南隅。」郭璞注 (烏弋の項参照)
×	「海内西経」「弱水、青水出西南隅。」郭璞注 (烏弋の項参照・安息の記載はなし)
×	×

郭璞注釈	江淹「遂古篇」	史書
	窮隆溟海、又有民兮。	
<p>「國在赤水東也。長臂人身如中人而臂長二丈、以類推之、則此人脚過三丈矣。黃帝時至。或曰、長脚人常負長臂人入海中捕魚也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「深目國」(穿胸・長脚)</p>	21 長股	×
<p>22 「海外南經」<u>「貫匈國」</u>郭璞注 「『尸子』曰、四夷之民、有貫匈者、有深目者、有長肱(股)者、黃帝之德嘗致之。」 「亦胡類、但眼絕深、黃帝時姓也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「深目國」</p>	22 深目、豈君臣兮。	×
<p>「其國無婦人也」 「殷帝太戊使王孟採藥、從西王母至此、絕糧、不能進、食木實、衣木皮、終身無妻、而生二子、從形中出、其父即死、是爲丈夫民。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「丈夫國」</p>	23 丈夫	×
<p>「王頊至沃沮國、盡東界、問其耆老、『國人嘗乘船捕魚遭風、見吹數十日、東一國、在大海中、純女無男。』即此國也。」 「有黃池、婦人入浴、出即懷妊矣。若生男子、三歲輒死。周猶繞也。『離騷』曰；水周於堂下也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「女子國」</p>	24 女子、	×
<p>「蓋後裔所出也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「三身國一臂國」</p>	25 及三身兮。	×
<p>* 『山海經圖讚』「貫匈交脛支舌國」</p>	26 穿胸	×
<p>「其人舌皆岐、或云支舌也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「貫匈交脛支舌國」</p>	27 反舌、	×
<p>「北極下亦有一脚人、見『河圖玉版』」</p> <p>* 『山海經圖讚』「三身国一臂國」</p>	28 一臂人兮。	×
<p>「其人行、脚跟不著地也。『孝經鉤命訣』…」</p> <p>* 『山海經圖讚』「跂踵國」</p>	29 跂踵	×
<p>「言脚脛曲戾相交、所謂雕題、交趾者也。或作《顛》、其爲人交顛而行也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「貫匈交脛支舌國」</p>	30 交脛、	×
<p>A「能飛不能遠、卵生、畫似仙人也。」 B「『放筮』曰「羽民之狀、鳥喙赤目而白首。」 「即卵生也。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「羽民國」</p>	31 與羽民兮。	×
<p>「有員丘山、上有不死樹、食之乃壽；亦有赤泉、飲之不老。」 「甘木即不死樹、食之不老。」</p> <p>* 『山海經圖讚』「不死國」</p>	32 不死之國、皆何因兮。	×

(附表 「窮隆溟海、又有民兮」及び【凡例】)

『山海經』本文
「海外西經」「長股之國、在雄常北、被髮。一曰長脚。」
「海外北經」「深目國在其東、爲人舉一手一目、在共工臺東。」 「大荒北經」「有人方食魚、名曰深目民之國、盼姓、食魚。」
「大荒西經」「有丈夫國。」 「海外西經」「丈夫國在維鳥北、其爲人衣冠帶劍。」
「大荒西經」「有女子之國。」 「海外西經」「女子國在巫咸北、兩女子居、水周之。」
「海外西經」「三身國在夏后啟北、一首而三身。」 「大荒南經」「大荒之中、有不庭之山、榮水窮焉。有人三身、帝俊妻娥皇、生此三身之國。」
「海外南經」「貫匈國在其東、其爲人匈有竅。一曰戴國東。」
「海外南經」「岐舌國在其東。一曰不死民東。」
「海外西經」「一臂國在其北、一臂一目一鼻孔。」 「大荒西經」「有一臂民。」
「海外北經」「跂踵國在拘纒東、其爲人大、兩足亦大。一曰大踵。」
「海外南經」「交脛國在其東、其爲人交脛。一曰在穿匈東。」
「海外南經」A「羽民國在其東南、其爲人長頭、身生羽。」B「一曰在比翼鳥東南、其爲人長頰。」 「大荒南經」「有羽民之國、其民皆生毛羽。有卵民之國、其民皆生卵。」
「海外南經」「不死民在其東、其爲人黑色、壽、不死。一曰在穿匈國東。」 「大荒南經」「有不死之國、阿姓、甘木是食。」

【凡例】

袁珂『山海經校注』(巴蜀書社一九九六)を底本とし、一部郝懿行『山海經箋疏』を底本とする前野直彬訳注『山海經』(集英社一九七五)を以て補った。(前野本は、「前」江淹「遂古篇」の異国には、1¹⁾ 32、の数字記号を附した。『山海經』本文及び郭璞注については、江淹「遂古篇」に記載される異国を基軸に、『山海經』本文及び郭璞注に見える関連記載を、例えば、「東北の国」の「沃沮」を例とすると、『山海經』本文には記載がないが「よつて×」、郭璞注には三カ所「大荒西經」「三面國」の項、「海外南經」「長臂」の項に関連記載がある。なお、『山海經』中に記載がある場合、郭璞注の数字記号は、『山海經』の記述に対応する。(例えば、「東北の国」の「肅慎」を例とすると、郭璞注「東夷傳曰……其俗……」は、『山海經』中の「肅慎」に関する二カ所の記載「大荒北經」「海外西經」の注釈。『山海經』及び郭璞注の英字記号(A B)は、数字記号()の下位分類である。史書(底本は中華書局本)の数字記号については、郭璞注が引く史書の記述は、江淹「遂古篇」が引くものは、1²⁾の記号で示した。江淹「遂古篇」の異国の記述の直接の典拠ではないが、同じ名称の異国の記述を持つ史書を、*で総て示した。郭璞『山海經圖讚』は、*で示した。(底本は嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』中華書局一九九五)。下線は、本稿の内容と関連するものに、筆者が随意に附した。

江淹「遂古篇」について

「遂古篇」の全編を通じて、『山海経』に基づく記述が最も多いのが、第一段落前半の天地開闢と上古の神々の描写²⁶、第四段落の異域の国々を羅列する箇所である。いずれも郭璞注との関わりは深いが、特に、郭璞注に対する意識が顕著に示されているのが、第四段落に見える異域の国である。そこには『山海経』の「海経」に見える奇国と、史書境界の双方に見える国々が記載されるが、その国々の組み合わせのうちに、江淹が郭璞注を如何に学び、何を継承しているのが如実に示されている。(以下、前載の附表 、『山海経』本文・郭璞注・江淹「遂古篇」・史書の対照一覧表) を、併せて参照されたい。

、郭璞注を媒介とすると一つの相関連する話として纏ってくる例

【第四段落・東北の国】(附表)

四海之外、孰方圓兮。沃沮肅慎、東北邊兮。

長臂兩面、亦乘船兮。

【訳】四海の外は一体どんな天地なのだろうか。沃沮国、肅慎國は東北の辺境。

長臂人、両面人は、亦た船に乗る。

江淹「遂古篇」第四段落

「四海の外」の冒頭、江淹が東北の項に描写する² 肅慎は、『山海経』「大荒北経」「海外西経」等に見えている。しかし、セットにする¹「沃沮」については、『山海経』の本文には記述がない。また、^{3 4} 長臂両面「の」「両面」についても『山海経』本文には見えないが、江淹はそれを「海外南経」に記載される「長臂」とセットにして船に乗る海洋の民に定めている。このように、『山海経』本文のみに照準を合わせると全く脈絡無く見える江淹の記載なの

だが、実は、郭璞注を媒介すると、一つの関連連する話として纏まってくるのである。

まず『山海経』「大荒北経」「肅慎」に対して郭璞注が典拠とするのは、陳寿の『三国志・魏書』「東夷伝」（以下「東夷伝」）に見える「挹婁（肅慎の古名）」の記載である点に留意したい。「東夷伝」には、この「肅慎」の記述に続けて、王頎が高句麗の王を追って「沃沮」に赴いた際、その耆老から聞いた、東海中の四つの奇国について、以下のよう
な記述を載せている。

王頎別遣追討宮、盡其東界。問其耆老、海東復有人不、耆老言國人嘗乘船捕魚、遭風見吹數十口、東得一島、上有人、言語不相曉、其俗常以七月取童女沈海。又言有一國亦在海中、純女無男。又說得一布衣、從海中浮出、其身如中國人衣、其兩袖長三丈。又得一破船、隨波出在海岸邊、有一人、頂中復有面、生得之、與語不相通、不食而死。其域皆在沃沮、東大海中。

【訳】王頎は別に使者を派遣し、宮を追討し、その東の果てにまでついでしまった。その年寄りに尋ねた、「海の東にはまた人がいるのかどうか」と。老人は答えた「この国の人は嘗て船に乗って魚を捕らえようとして、風に見舞われて数十日吹き飛ばされ、東に一つの島を得た。上には人がいて、言葉はわからなかった。その風俗は則ちいつも七月になると童女を海に沈めるといふ。」また、老人が言つに、「また海中に一國があり、そこには女だけで男は居ない」。また、話すには、「海中から一つの一枚の衣が浮き出ているのを得た事がある、その身の部分は中国の人の衣装の様だが、その両袖は三丈もの長さがある」といふ。また、「破損した船が一艘あった。それは波が立つのに随って海岸のあたりに打ち上げられたが、うなじにまたもう一つの顔の有る人が居たので、これを活きたまま捉えた。話をしたが言葉が通じず、ものを食べずに死んでしまった。」といふ。その域は、皆、

沃沮の東の大海中に在る。

陳寿『三國志・魏志』「東夷伝」

この、「沃沮」の長老が語る東方の異国は 七月に童女を海に沈める国。 女ばかりの国（女子国）。 袖の長さ三丈もある衣を着る国（長臂国）。 項に二つの顔の有る国（両面国）。 の四つであるが、郭璞はこのうちの、後者三つを『山海経』の「女子国」「長臂国」「三面国」に比定し、それぞれの注に「東夷伝」を引いているのである（附表）。（このように、郭璞『山海経』注では、「東夷伝」に伝えられる「沃沮」東方の奇国に度々言及すること、また『山海経』「肅慎」の説明として、「東夷伝」の「沃沮」の記述の前に見える「肅慎」の記事を引くことなどから、江淹が『山海経』本文には見えない「沃沮」と「肅慎」とを組み合わせて東北の国に定めるのは、郭璞注とそこに引く「東夷伝」に由来すると言えよう。

また、江淹「遂古篇」の記載が「東夷伝」に直接基づくのではなく、「郭璞注に引く「東夷伝」によったと思われる証左は、江淹が、「沃沮」の記載に続けて「長臂両面、亦乗船兮（長臂人、両面人は、亦た船に乗る）」と言い、「両面」という語を使う点にある。今『山海経』「大荒西経」には「三面」の「顛頊の子」の記述があるが（附表）、「両面」の語は、これに対する郭注の評語に見えている。郭璞はこの「三面」の項目に対して、王頊の沃沮国に関する「東夷伝」の記述を引き、次の様に注解している。

言人頭三邊各有面也。（「東夷伝」曰）玄菟太守王頊至沃沮國、問其耆老、云：「復有一破船、隨波出在海岸邊。上有一人、頂中復有面。與語不解了、不食而死。」此是兩面人也。

【訳】（これは）人の頭の三辺におの顔がある事を言う。玄菟太守の王頊が沃沮国に至った時その耆老に問うた。（老人）が云うに、「また破損した船が一艘有り、それは波が立つのに随って海岸のあたりに打ち上げられた。

船の上に一人いて、頭の頂きにまたもう一つの顔があった。話をしたが理解出来ず、物を食べずに死んでしまった、た、という。これが両面の人である。

『山海経』「大荒西経」「三面」郭璞注）
『東夷伝』では「項中復有面」と書かれるのが、郭璞注では「頂中復有面」と記される。書写錯誤か、扱った版本の違いかは判定しがたいが、江淹が「遂古篇」第一段落末尾に、「山経」古書、亂編篇兮。郭釋有兩、未精堅兮。（『山海経』は古の書、篇は乱れている。郭璞の解釈には二種あるが、未だ精密ではない。）」と謂うように、恐らく、江淹の段階ですでに郭璞注に異同や不備があった事とも無関係ではないだろう。²⁷しかし、ここでより重要なのは、二つの顔と三つ顔では、数は合わないものの、この東海中の二つ顔の奇人の史伝を、『山海経』「大荒西経」中の「三面は顛項の子」の項に引用して、「此是両面人也。」²⁸といい、「両面」の語を使用したのが、ほかならぬ郭璞であったことである。ここで、郭璞が、『山海経』の「三面」の神の記載に対して、史書中の「二つ顔の異国」の奇聞を充て、さらには、『山海経』の「長臂」の民の記載に対して、史書中の「袖の長い衣を着る異国」の奇聞を充てるのは（附表）、或いは「注釈の疎漏」ともみなせよう。しかし、むしろ、こうした点にこそ、郭璞の『山海経』注釈の基本的態度が現れていると言えるのではないか。それは、「顔が幾つもある人」、「臂が地に着くほど長い人」の住む奇国の実在を信じ、類似の例を以てこうした奇国の実在を証明しようとする姿勢である。そもそも、郭璞にとってもこのような奇国の存在は「厥變難原（その変化は突き止めがたい）」事象²⁸であったが、そうした不可思議な事象に対しても、郭璞はそれを否定せず、史書の情報を以て一つ一つ実証を試みている。こうした郭注の姿勢を集約して示すのが郭璞『山海経序』であるが、郭璞はこの序文の中でも、王頎が沃沮で、「長臂・両面」の人に逢ったことについて触れ、次のように述べている。

若乃東方生曉畢方之名、劉子政辨盜械之尸、王頎訪兩面之客、海民獲長臂之衣、精驗潛效、絕代懸符。

【訳】東方朔が畢方の鳥の名に通曉していたことや、劉子政(向)が罪を犯してかせを詰められた尸を弁別したこと、

王頎が、両面の事を訪ねたことや、海辺の民が長臂人の衣を獲たことは、まぎれもない証拠があらわれ、時代を経て遙かに符号したのである。
郭璞『注山海経序』

『山海経』を最初に校訂したのは前漢末の劉歆前五三? 一三二である。『山海経』校訂の意義を述べた『山海経叙録』において、劉歆は、武帝の時代、献上された異鳥について、東方朔が『山海経』所伝の異鳥(畢方)であると言いつた話とともに、²⁹宣帝の時代、上郡の石室から出てきたうしろ手に縛られ桎をはめられた尸体を、劉歆の父、劉向が『山海経』所伝の罪を犯して枷を詰められた³⁰「貳負の臣」であると見分けた話を挙げ、この事件が有ってから文学大儒が皆『山海経』を読むようになった、と記している。郭璞の『注山海経序』は、この劉歆の『山海経叙録』を引き継ぎつつ、郭璞自身の怪異観念の展開される纏まった文章としても注目される。郭璞は「異」を「異」と認識するのは、主観の問題であり、「見慣れたものを翫び稀に聞く物を奇とするのは、人情の通弊である」と嘆く。³¹そして、この世で「奇異」と銘打たれている事物を、博物の知識を以て相対化することを主張する。それゆえ、郭璞は『注山海経序』においても、先述の「異鳥」「貳負の臣」の例と共に、「東夷伝」に記される東海中の「両面」「長臂」の記載を、『山海経』の記載が時を経て証明された例として特記しているのである。

ここで確認すべきは、『山海経』の奇異な世界の实在を証明する際、郭璞が、史書の記述を重要な論拠としていること、中でも、「東夷伝」への言及が際だって多いことであろう。『三国志』の編者である陳寿は、郭璞と年の差は僅か四十才ほどの同時代人であり、郭璞の時代、最も新しい边疆誌はこの『三国志・魏志』「東夷伝」であった。郭璞にとって、

最新の史書に所載される東北の国「沃沮」と、そこに伝えられる「長臂」「両面」等の話は、『山海経』が伝える奇国の真实性を証明する重要な史実だったのである。

以上の点を確認したところで、再度、江淹「遂古篇」の「沃沮国、肅慎国は東北の边境。長臂人、両面人は、亦た船に乗る」の句を振り返り、郭璞注との関係を整理しよう。江淹が「四海の外、東北の国」の描写に於いて、『山海経』本文に記載されない「沃沮」を、『山海経』の「大荒北経」に見る「肅慎」と併せて「東北辺」に配するのは、明らかに郭璞注に引かれる「東夷伝」を意識してのことであろう。さらに、『山海経』「海内南経」に載せられる「長臂」に対して、「大荒西経」本文の「三面」ではなく、その郭璞注が「東夷伝」より引く「両面」を組み合わせるのも、郭璞注の記述をそのまま踏襲したためと言える。このように、江淹が「東北」の項で組み合わせるのは、郭注に引く「東夷伝」の東国ばかりであり、その範囲は、郭璞注の記述を超えていない。換言すれば、この項は郭璞注なしには成立しえないのである。

では、「遂古篇」東北の項で、江淹が、このように郭璞注をそのまま踏襲するのはなぜか。それは、「世の『山海経』を覽る者は、皆其の閑誕迂誇にして、奇怪俶儻の言多きを以て、疑わざるなし」と異端視された『山海経』の記述に対し（脚注六）、それらを「異」として斥けることなく、博物的知識を以てその荒唐無稽な奇国の実在を証明せんとした、郭璞の注釈態度に忠実に倣うためと判断されよう。その際、史書の边境志に見る最新情報を特に重視するという郭璞注の姿勢は、江淹「遂古篇」東北の国に続く東南の国において継承され、新たな発展を見るのである。

、郭璞同様、史書の情報を以て『山海経』的世界の存在を証明しようとする例

〔第四段落・東南の国〕（附表）

江淹は、東南の異国を描写して、次の様に云つ。

東南倭國、皆文身兮。其外黒齒、次裸民兮。

侏儒三尺、並爲隣兮。

【訳】 東南の倭国は皆な入れ墨の身体。其の外に黒齒が居り、その次には裸民がいる。侏儒はたつたの三尺、並んで隣あつている。

江淹「遂古篇」第四段落

ここに記載される「倭国」「黒齒国」「裸民国」「侏儒国」のうち、『山海経』の本文に所載されるのは「倭国」「黒齒国」のみであり、その配置方角も「海内北経」（「倭国」と「海外東経」「大荒東経」（「黒齒」は二カ所に所載）とばらばらだが、郭璞注を照準とするとまた一つの纏まりを見せる（附表）。郭璞は『山海経』「海外東経」の「黒齒」に対して、次の様に注解している。

「東夷伝」曰・倭國東四十餘里、有裸國、裸國東南有黒齒國、船行一年可至也。

【訳】『三国志・東夷伝』には、次のようにいつている。倭国から東に四十餘里、裸国が有り、裸國の東南には黒齒国が有つて、船で行くと一年で至る事が出来る、と。

（『山海経』「海外東経」「黒齒国」郭璞注）

郭璞はここでも「東夷伝」の情報に基づきつつ、「黒齒国」のほか、「倭国」「裸国」に言及している。よつて、前述した東北の国と同じく、「遂古篇」の東南の項は、基本的に『山海経』「黒齒国」に対する郭璞注を踏襲していると言える。しかし、「東夷伝」を引く郭璞注には、「侏儒国」の記載が抜けている。一方郭璞注の基づく「東夷伝」の原

文を見ると、そこには、東の方、「倭」の南方に位置づけられる国として「又有侏儒國其南、人長三四尺、」という記述が見え、その東南には「裸国」「黒齒国」が記されている（附表）。よって、江淹がこの東南の項において、⁸「侏儒」を、⁵「倭国」⁶「黒齒」⁷「裸民」と共に描くのは、「東夷伝」の記述を以て補ったものであると言えよう。³²江淹はさらに、「海内北経」「倭国」の郭璞注には見えない⁵「倭國、皆文身兮」という記述を、同じく「東夷伝」の倭国の項に見る「男子無大小皆鯨面文身」等の記述に基づき、補充している（附表）。このように、「遂古篇」東南の国では、郭璞が東南の「黒齒国」の注として引く「東夷伝」の史伝を継ぎ、郭璞注からこぼれ落ちた「侏儒三尺（侏儒はたったの三尺）」や倭国の「文身（いれずみの身体）」などの記載を、江淹自ら「東夷伝」を以て補っているのである。これは、江淹が、史書を以て『山海経』に補注する郭璞注の態度を継承するに留まらず、さらに発展させた例と言えるのではないか。³³

また、「倭」については、『宋書』倭国伝の「倭の五王」に関する記載に注目したい。この時期の東アジアには、中国南朝の劉宋王朝と朝鮮半島の高句麗、百済の二国との間に冊封関係が成立し、これに日本も参加するという情勢が形成されていた。朝鮮半島の三国鼎立の情勢に伴って、倭国は、自国の勢力を拡大するために中国の庇護を求め、相次いで中国南朝に入貢を行ったのである。³⁴『宋書』倭国伝に拠れば、倭の五王のうち、第二代倭王済の入貢は元嘉二十年（四四三）、すなわち、江淹誕生の前年に当たり、また、第五代倭王武（雄略天皇）が遣使上表し使持節都督六国諸軍事・安東大將軍・倭国王に除せられたのは、江淹が史職に就き檀超と共に国史編纂に携わる直前、斉高帝が帝位に就いた昇明二年（四七八）のことである。³⁵また、『南齊書』『梁書』『南史』の各書倭国伝も、江淹が史職に就任する前後の時期に、倭国への官爵下賜の事実を伝えていることからすれば、³⁶江淹は倭国の入貢について見聞す

るのみならず、史家として自ら記録した可能性も大いにある。そうした倭人との接触体験を通じて江淹が得たものは、『山海経』中の「黒齒国」や「倭国」の記載に対して、当時の最新の史書『三国志』「東夷伝」の記述を以て、その実在を説いた郭璞注への信頼と共鳴だったのではないだろうか³⁷。

ところで『山海経』「海経」中の遠国異民を注する際に郭璞が引くものには、史書や汲冢書と共に、『詩含神霧』『孝經援神契』等、緯書の記述が少なくない（附表 ）。一方江淹も、現存する作品には緯書的世界への関心が認められるものの³⁸、「遂古篇」の遠国異民の記載において特に郭璞注から継承発展させるのは史書を引く態度である。このように史書の記述を重視することまた、江淹が史書によって実証された奇国のみを「四海の外」に描き、史書に見えぬものについては、たとえ郭璞注が実在のものとも見なす『山海経』の奇国であっても「四海の外」には描かず、続いて「窮隆溟海、又有民兮」と述べたあと、さらに遠方の国々を描く部分の方に列挙する点にも傍証される³⁹。江淹と緯書の関わりに就いては詳しくは別稿に譲るとして、『山海経』の遠国異民の記述に対し、江淹が、郭璞にもまして史書を重視する背景には、「遂古篇」が手掛けられた五世紀は、『三国志』補注のほか、范曄『後漢書』、沈約『宋書』紀伝部などの正史が相次いで編纂された史書編纂・古史補亡の盛行期であったこと、また、その中で江淹自身が国史を担う立場にあったことを考慮すべきであろう。

、郭璞注には用いられない史書の地理誌に基づき、郭璞注の闕を補い拡張させた例

【第四段落・西北・西南の国々】（附表 ）。

東方の国に比べ、『山海経』中の西方の国に対しては、郭璞の引く史書は多くはない。唯一『漢書』「西域伝」から

の引用例が「弱水」及び「不周山」の項目に見え、そこには「烏弋」「条支」「于闐」などの西域の国の名が記載されるものの（附表）、その記載には省略が多い。その闕を補うかのよう、「遂古篇」の西北・西南の項では、郭璞注には見えない西域の国々が描写される。

西北丁零、又烏孫兮。車師月支、種類繁兮。馬蹄之國、善騰奔兮。西南烏弋、及罽賓兮。天竺于闐、皆胡人兮。條支安息、西海滄兮。人迹所極、至大秦兮。珊瑚明珠、銅金銀兮。瑠璃瑪瑙、來雜陳兮。碑磔水精、莫非真兮。雄黃雌石、出山垠兮。青白蓮花、被水濱兮。宮殿樓觀、並七珍兮。

【訳】西北には丁零、又た烏孫、車師、月支、これらは種類が繁雑である。馬蹄の国の者は、騰奔するのが得意。西南には烏弋、罽賓、天竺、于闐、これらは皆な（同じ道筋にある）胡人の国。條支、安息は西海の滄（ほとり）極まるところ、とうとう大秦に至る。そこには珊瑚や明珠、銅金銀、瑠璃や瑪瑙などが、入り混じって並んでい。碑磔、水精はみな本物、雄黃や雌石は山地の崖から産出する。青と白の蓮の花は水浜（みずべ）を蔽い、宮殿の楼観は、七つの珍宝を並べる。江淹「遂古篇」第四段落

これらの西方の国々を、以下の三種に分類し、それぞれに参照されたと思われる史書を、括弧内に示してみよう。

A、史書と『山海経』本文及び郭璞注の総てに記載される国

西北「丁零」(「海内経」・「史記」「匈奴列伝」「漢書」「匈奴伝」「魏略」「西戎伝」「後漢書」「烏桓鮮卑伝」)

月支「海内東経」・「史記」「大宛伝」「漢書」「西域伝」「魏略」「西戎伝」「後漢書」「西域伝」)

馬蹄「海内経」・「魏略」「西戎伝」)

西南「天竺」(「海内経」・「史記」「西南夷列伝」「漢書」「西南夷両粵朝鮮伝」「西域伝」「魏略」「西戎伝」「後漢

江淹「遂古篇」について

書『西域伝』

B】、『山海経』本文には見えず、郭璞注と史書の双方に記載される国

西南「烏弋」(『海内西経』「弱水」郭璞注・『漢書』「西域伝」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

于闐」(『西山経』「不周之山」郭璞注・『史記』「大宛伝」『漢書』「西域伝」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

域伝』
條支」『海内西経』「弱水」郭璞注・『漢書』「西域伝」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

C】、『山海経』本文及び郭璞注に見えず、江淹が新たに史書によって補った国

西北「烏孫」『史記』「大宛伝」『漢書』「西域伝」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

車師」『漢書』「西域伝」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

西南「罽賓」(『漢書』「西域伝」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

安息」『史記』「大宛伝」『漢書』「西域伝」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

大秦」『魏略』「西戎伝」『後漢書』「西域伝」

括弧内の史書のうち、郭璞以前のものとしては、『史記』、『漢書』、『三国志』、『魏略』(裴松之『三国志』注引魚豢『魏略』「西戎伝」)があり、郭璞以後には『後漢書』がある。ちなみに裴氏の引く魚豢『魏略』「西戎伝」は郭璞の時代に存在していたが、郭璞は注釈に引いていない。⁴⁰

では、以下、主に、【C】の江淹が新たに史書によって補った国々が、いかなる典拠に基づき描かれるのかについ

て見てみたい。まず、西北の⁹¹⁰¹¹¹²「西北丁零、又烏孫兮。車師月支、種類繁多兮。（西北には丁零、又た烏孫、車師、月支、これらは種類が繁雑である。）」のうち、「丁零」は、『山海経』本文・郭璞注・史書総てに見える古い国だが、郭璞が注釈に引くのは緯書『詩含神霧』である。一方、「丁零・烏孫」のセットの描写としては、『魏略』「西戎伝」みえる「…而北丁令在烏孫西、似其種別也。」「…北海之南自復有丁零、非此烏孫之西丁零也。」という記述が想到されよう。さらにこの記載は、「丁零」は「北丁零」などに分かれ種類が一つではなかった事を伝えている。また、「車師月支」のうちの「月支」も、『山海経』本文・郭璞注に見える古い国であるが、この郭璞注でも種の多さについての言及は無い（附表）。他方、『魏略』「西戎伝」所載の「月支」を見ると、「…有月支餘種、葱茈羌、白馬、黄牛羌、各有酋豪…」と、多くの種族が有ったとの記述があり、対にされる「車師」にも「…南去車師六國五千里」と「車師」が六国に分かれていたことを伝える記載がある。とすれば、「丁零烏孫、車師月支」が「種類が煩雑」というのは、郭璞注に依るのではなく、史書 特に『魏略』の記述に典拠を求めていると謂えよう。さらに、西北の項の末句の「騰奔するのが得意」という¹³「馬蹄の国」についても、『魏略』「西戎伝」には、「丁零」「烏孫」と共に「馬蹄」が纏めて記載されている事から（附表）、この西北の項目の骨子は、やはり『魏略』「西戎伝」に依るものと思われる。

続く西南の項にみる¹⁴¹⁵¹⁶¹⁷西南烏弋、及罽賓兮。天竺于闐、皆胡人兮。（西南には烏弋、罽賓、天竺、于闐、これらは皆な（同じ道筋にある）胡人の国）の記述について、江淹がこれらの国を「胡人」と述べるのは、『山海経』「海内経」の「天毒」に対して、郭璞が「晋大興四年、天竺、胡王獻珍寶」と記述するのを意識するものと思われる（附表）。また「烏弋・罽賓」は、共に『史記』には見えず、『漢書』や『魏略』『後漢書』に記載が見える西域の国。『後漢書』「西域伝」には、「于真国」の後「西夜国」「子合国」を経た「徳若国」の里程説明に「歴罽賓、六十餘日行至烏弋、山離國」

と記載しており、「于寘」と「罽賓」「烏弋」が同じ道筋に並んでいたことを物語る。また「罽賓」は「天竺」と共に「大月氏」に属すると言う『魏略』『西戎伝』の記述を併せると、「于寘・罽賓・烏弋・天竺」が地理的にひとつのまとまりを爲してくる。よつて江淹が西南の「烏弋罽賓、天竺于寘」を纏めて「胡人」というのは、『山海経』『天毒』に対する郭注を意識しつつ、やはり『後漢書』や『魏略』の記述に拠るのものと見えよう。続けて西南の国として描かれる¹⁸¹⁹ 條支安息、西海濬兮。の「安息」についても、「遂古篇」が、「條支」「安息」をセットにして「西海」のほりとりにおく点や、その先に「大秦」を描く事からすれば、江淹は、『魏略』『西戎伝』の「大秦國、一號犁軒、在安息、條支西。大海之西。」や『後漢書』『安息西界極矣。自此南乘海、乃通大秦。』の記載に基づくものと見なすのが良いだろう。

人跡の極まる果ての地は、「大秦」。^{ローマ}『史記』『漢書』には「犁軒」或いは「犁斬」とあるが、魚豢『魏略』『西戎伝』と范曄『後漢書』『西域伝』には、²⁰「大秦」と伝えられている。「西海」は、今の地中海で、郭璞注引く『漢書』にも記載される。しかし、「安息」「大秦」は『山海経』本文にも郭璞注にもなく、江淹が補つたものであり、「條支安息、西海濬兮。人迹所極、至大秦兮。(條支、安息は西海の濬。^{ほしり}人跡の極まるところ、とうとう大秦に至る)」の記載、そしてそこに産出する繁華な物品を数え上げるシーンは、基本的に、魚豢『魏略』『西戎伝』と范曄『後漢書』『西域伝』に依っている。この「大秦」の描写は「遂古篇」一編に於いて、最も多くの文字が用いられるクライマックスシーンだが、ここでは、二つの事を指摘したい。一つは、「大秦」に産する物産の中に『魏略』『後漢書』に見られた動物はなく(附表、江淹「遂古篇」²⁰ 大秦)及び対応する史書の記述を参照)、江淹「遂古篇」では、「珊瑚明珠、銅金銀兮。瑠璃瑪瑙、來雜陳兮。碑磔水精、莫非眞兮。雄黃雌石、出山垠兮。」というように、その記述は、明らかに

鉱物玉石類に偏っている事である。これは、以前に拙稿（二〇〇二）でも詳述した事のある、江淹生来の鉱物愛好によるものと言えよう。⁴¹ 異域の西の果て、色鮮やかな鉱物玉石を産する地として描かれる江淹の「大秦」には、また、煌びやかな宝玉に彩られた荘嚴な宮殿が描写されている。この「碑礫水精、莫非眞兮。」「宮殿樓觀、並七珍兮。」という燦然たる鉱物や宮殿の情景描写は、『後漢書』「西域伝」の「（大秦）宮室皆以水精爲柱、食器亦然。」の記述からイメージを得たものであろう。

二点目に注目すべきは、先述の「條支」「安息」と共に、この「大秦」の記述が主に依拠した『後漢書』「西域伝」が、江淹とほぼ同年代の人、劉宋の范曄（三九八—四四五）による最新の正史であったことである。前漢の武帝が張騫を派遣して以降、安息で留まっていた西域の見聞は、張騫から遅れること二二三年、再び西征を行った後漢の班超の部下甘英の報告により、一気に地中海東岸部まで拡張され、「大秦」に關する多くの見聞が得られるようになった。いま、『後漢書』「西域伝」には、「…甘英が西海に至り帰還した。経たところは皆前人未踏で、『山海經』にも所載されないが、みなそれぞれの風土があり、甘英はその珍奇なる様を中国に伝えた」との記載がある。⁴² 新たな西征の行われなかった四—五世紀に於いては、未知なる西方の地の情報を伝える『後漢書』「西域伝」の記事は、恐らく、江淹が「遂古篇」の西南の項を記述するに当たって、最新かつ最果ての情報として、最も注目したものであったに違いない。

このように、「遂古篇」西北・西南の項で江淹は、史書の西域志の情報を補充する際、郭注に引かれない史書『魏略』や、郭璞以降の史書『後漢書』「辺境志」の記載に基づき、『山海經』や郭璞注に見えない西の果ての国を記述する。つまり、江淹は、郭璞注の引用するものよりも、更に新しい地理志に基づき、『山海經』世界を補填しようとしていると見なせよう。

以上の事から、江淹「遂古篇」は、石本氏の言うような江淹の「神秘趣味」によって着想されたものではなく、江淹も郭璞同様、『山海経』の世界を实在のものと思なし、新たな知見に基づき郭注の闕を補うのみならず、『山海経』そのものの拡張をも志した著述であつたと言えるのではないか。

3、郭璞注の闕 仏教的宇宙

江淹が『山海経』及び、郭璞注の補欠を志したのは、新たな史書の登場が契機となつたばかりではない。筆者は、ここで、西方から流入した新来の仏教的世界観との接触が、江淹を中国古来の神話的地誌である『山海経』の「再検討」へ向かわせたという可能性を指摘したい。

江淹の思想については、『江文通集』「自序」に「深信天竺縁果之文、偏好老氏清浄之述」と表白する如く、道仏混交の形態を保つていたと思われる。このうち、江淹の仏教理解については、従来の江淹研究では殆ど触れられて来なかつた⁴⁴。こうした状況に於いて、江淹文学と仏教との関わりについて述べた唯一の論究として注目されるのが、冒頭に示した「五色の筆」説話の背景に、江淹が中年以降、仏教思想 特に三世果報の説に傾倒した為に、文学に対する態度が変わつた事を指摘する錢志熙氏の見解である（一九九二）⁴⁵。錢氏に拠れば、江淹の早期の文学には隱逸志向が強く、生命の儂さや無常を嘆き、神仙的解脱を詠う魏晋以来の文学の影響があつたが、呉興へ左遷された頃から、江淹の関心は当時士人の間に流行した浄土学に遷つていったという。生の憂いや死の懼れからの解脱を説く浄土の三世因果の説に傾倒した事で、前半生に特徴的な哀傷文学は手がけられなくなった事が、「才尽」説話の背景に

あるというのである。

3 1 1、江淹「遂古篇」にみる仏教的世界観（1） 「恒星不見」

では、仏教的世界観の影響は、「遂古篇」に於いて、いかなる形で示されているのだろうか。まず指摘すべきは、江淹「遂古篇」が、唐の道宣撰『廣弘明集』卷三の「歸正篇」第一之三に所収されている事である。江淹の「遂古篇」が、初唐の仏教論集『廣弘明集』に採用されている事は、初唐に於いて、この作品が、六朝末の仏教受容の好例として評価されていた事を物語るものであろう。

江淹「遂古篇」第二段落、後半部分を占めるのは、こうした新来の仏教的世界観との接触によって展開された釈迦誕生を巡る著名な仏教争議についての言説である。

迦維羅衛、道最尊兮。黄金之身、誰能原兮。恒星不見、頗可論兮。其說彬炳、多聖言兮。六合之内、心常渾兮。幽明詭性、令智愦兮。

【訳】 釈迦誕生の地、迦維羅衛（カピラ国）の仏道は最も尊い。仏誕生の源を誰がたずねる事が出来ようか。（周の莊王の夏四月に）恒星が見えなくなったのは（西方に釈迦が生まれた為とする）説は、大いに論じるに値しよう。釈迦の言説は精彩を放ち、聖なる言葉が多い。天地四方の内、心はつねに混沌とし、現世と死後に関する事は性をあざむき、縁起を悟る智を愦くしているのだ。

江淹「遂古篇」第二段落、
「恒星不見」は、本来『春秋』莊公七年に見える天象不順を記した記載で、仏教とは何ら関わりを持たない。⁴⁶しかし、

仏典の翻訳にあたって、旧暦四月八日の釈迦の誕生が次第に誇張され、釈迦誕生のしるしとして、『春秋』「恒星不見」の記事が附会されたのである。⁴⁷ 釈迦誕生に「恒星不見」の記事を附会する説については、六朝期にあつて様々な角度から議論されたが、「遂古篇」に見えるこの問題への言及は、同時代人である沈約と陶弘景の間に交わされた一連の言説に関わるものと思われる。

すなわち、燧人氏以降、火が使われ生肉が熟肉に改まったのは仏道が伝わった兆しで、その後中国の古典に不殺生が解かれるようになるのも次第に仏道の精神が伝わったためである、とする沈約の「均聖論」に対して、茅山派遣教の教主でもある陶宏景は、釈迦は周莊王の御代に漸く誕生したものであり、堯舜・夏殷の時代には誕生しえないと言つ⁴⁸。この陶宏景の批判に対して、沈約は、さらに次の論拠を以て反駁する⁴⁹。すなわち、釈迦誕生の生年月は仏典には年暦も歴史記録も無いので判らず、釈迦誕生が周莊王の御代であるとするのは『春秋』の「魯莊七年四月辛卯、恒星不見」を根拠にしているに過ぎぬ。しかし、夏殷周の暦は異なる上に、外国でどの様な暦を使っていたのか判らない。仮に外国が夏殷周の暦を使っていたとしても、どの暦で考えても、仏家の説く四月八日には一致せず、結局釈迦誕生の年月日については判然としない。釈迦誕生の時、ただ空中が明るくなったといわれるだけで、「星辰が見えない」という記述はない。瑞祥として日月星辰が動かないこともある。またある説では明星が現れた時に（釈迦が）生まれ落ちて七歩歩いたと言われるが、初めに「星辰が現れていなかった」とは語られておらず、『春秋』「恒星不見」の意趣とは異なる、というものである。

陶宏景・沈約と同時代に活きた江淹が「黄金之身、誰能原兮。恒星不見、頗可論兮。」と云うのも、この一連の仏教論議と無関係ではないだろう。江淹が「頗る論ずべし」という事からすれば、江淹も沈約同様、『春秋』への附会

論に疑問を呈するものと思われる。⁵⁰ ちなみに、江淹は、晩年、熱心な仏教保護者であった梁の武帝蕭衍に仕えているのだが、ほぼ同時期に、陶宏景もまた梁の武帝に「山中の宰相」と称され手篤い処遇を受けている事、沈約も晩年の武帝に仕えていた事などは、「恒星不見」の議論を含む「遂古篇」の成立期考察の一助と為ろう。⁵¹ しかし、沈約・陶宏景と比べると、「遂古篇」に見る仏教的世界への興味は、教学的側面というより、むしろ、地理物産、神話といった側面に重点があるようである。

このように「恒星不見」議論に示されるのは、西方印度からもたらされた仏教的世界観が、中国在来の世界観の再考を促す刺激剤となった、という現象である。思うに、江淹が、中国古来の神話的地誌である『山海経』の再検討を志したのも、まさにこうした仏教的世界との接触が大きな契機となったのではないかとすれば、その江淹の仏教的世界は、郭璞注との関わりにおいて如何に展開したのか。以下、それを「遂古篇」の西方観に見てみたい。

3 1 2、江淹「遂古篇」にみる仏教的世界観（2） 西方観念

博物学的知識を有し、奇異な事象に内在する造化の理を執拗に追求した郭璞であったが、その郭璞の求めた『山海経』の世界には、仏教的世界への関心が極めて薄い、という特徴がある。三世因果を説く仏説はすでに東晋の慧遠に始まるものの、現存する郭璞の作品には、因果説を始めとする仏教教理への言及は全く見ることができないのである。郭璞の仏教に対する無関心は、『山海経』「海内経」に見える「天毒」への注釈にも如実に示されている。すなわち、『山海経』の「天毒」は、「東海之内、北海之隅」に位置づけられているのだが、郭璞はこの「天毒」に対して「天毒、

即、天竺國。」との注釈を施している。このため、歴代の諸注釈家の解釈にも混乱をきたしており、「天竺」であるならば西南に位置すべきである、或いは、脱文誤字があるのでは等との評釈がなされるが、本稿で指摘したいのは、『山海経』の奇国の実在を史書によって証明せんと実証的作業を積み重ねてきたはずの郭璞が、東海・北海中に位置し史書にも見えぬ「天毒」に対し、いとも安易に「天竺」であると注解する誤りを犯していることである。⁵³郭璞に倣い自らも最新の史書辺境志の記述を以て『山海経』の闕を補う江淹は、郭璞『山海経』注に見るこうした仏教的世界の不備に対して、ある種の物足りなさを感じていたのではないだろうか。

* 「崑崙」

江淹「遂古篇」における仏教的世界の展開を、我々は、まず、西方に聳える巨大な山「崑崙」に見ることができる。王嘉の『拾遺記』に、「崑崙山者、西方曰須彌山、對七星之下、出碧海之中。」と描写されるように、仏教の宇宙山と混交した崑崙には海の中に聳え立つ特徴があるが、「遂古篇」の第一段落でも、「穆天子の西征」の記載に続けて、「崑崙之墟、海此間兮」と、海の中に聳える崑崙を描いているのである。この様な海に囲まれた崑崙の姿は、むしろ、『山海経』本文にも、⁵⁴郭璞注にも見ることが出来ない。⁵⁵

『山海経』の「崑崙」「西王母」の記述に対して郭璞が注釈に最も多く引くのは汲冢書である。汲冢書の出現によって、郭璞が『山海経』世界の実在を確信しえたこと、また、江淹における汲冢書も、郭璞同様、古字古物によってそのリアリティーを保証されるものであったことについては冒頭で記した通りだが、江淹「遂古篇」の第一段落後半に見える、穆天子西征の描写についても、汲冢書と『山海経』の双方に基づく記載がなされている（前掲「遂古篇」全

文参照)。

江淹は、穆王の巡遊したこの「崑崙」⁵⁶ 聳える西方世界を、「周国を去ること遙か一万二千里の彼方(去彼宗周、萬二千兮。)」と、史書の边境誌に倣った「去+場所+距離」という筆法を用いて締めくくっている。このような具体的な距離の記述は『穆天子伝』の原文にも見えない。とすれば、穆王西征の記載に対して、江淹が敢えてこのような史書の边境誌に倣った筆法を採るのは何故だろうか。思うに、周の穆王が西征して西王母に見えたという話が、『山海経』の虚妄性を批判する『史記』にも史実として記載されていること⁵⁶、そして、郭璞『注山海経序』でも、この『史記』にみえる穆天子の天下巡遊の記載を引いて、『山海経』世界の实在を主張することに因るであろう(脚注九)。この様に、『山海経』と汲冢書に展開される世界は、江淹に於いても、郭璞同様、史実として捉えられていた。しかし、魯迅が「西王母」と共に『山海経』の中で最も世に知られると称する「崑崙」⁵⁷ と、それが聳える西方世界に対して、江淹は、新たに仏教的宇宙を持ち込むのである。

* 「大秦」

また、先述した「四海の外」において、『山海経』に見える記載に併せ史書の記述を以て実証的に描く西方世界にも、郭璞注に欠ける仏教的世界観からの影響が認められる。江淹が「四海の外」の西の果ての国として描く「大秦」の記述が、基本的に『魏略』「西戎伝」、『後漢書』「西域伝」という二つの史書の縫合である事については先に述べたが、その最後の四句、「青白蓮華、被水濱兮。宮殿樓觀、並七珍兮。(青と白の蓮の花は水浜を蔽い、^{みずべ}宮殿の樓觀は、七つの珍宝を並べる。)」のうち、「七珍」及び「青白蓮華」の語は史書に見ることはできない。これらは、いずれも仏教に深く

江淹「遂古篇」について

関わる語なのである。すなわち、「七珍」は仏教の「七宝」のこと、「青白蓮華」は『法華経』の「青蓮華香、白蓮華香」を典拠とし、「仏骨」を意味する。また、「蓮華」については、江淹の「蓮華賦」にも「植東國之流詠、出西極、而擅名」と、「西極」則ち、「大秦」の地に産する華として詠まれているのである。こうした点からすれば、「遂古篇」の「四海の外」の西の果て「大秦」には、西方に極楽浄土を求める仏教的イメージが重ねられていると見なせよう。遙か西の海の彼方、色とりどりの鉱物玉石を産み、仏華蓮華の咲き誇る地、煌びやかな仏界の七宝に彩られた荘嚴な宮殿が聳える最果ての国「大秦」は、恐らく、江淹の『山海経』的世界において、この世に確実に存在する理想郷ユートピアであった。

3 2、江淹に於ける『山海経』

実在する遙かなる時空

「遂古篇」の末尾に「茫茫造化、理難循兮」と慨嘆する様に、江淹にとって、造化の理は不可知であった。「造化」の理は判らない、ゆえに、江淹にとって重要なのは、道教であれ仏教であれそれぞれの説く世界が、「現実に存在する事物」を通じて立証されてゆく事自体にあったのではないか。

「遂古篇」の第二段落に、「漢鑿昆明、灰炭全兮。（漢の武帝の御代に昆明池を鑿つと、灰炭がそのまま保存されていた。）⁵⁸」という記述があるが、これは梁の慧皎（四九六—五五四）『高僧伝』の「竺法蘭」に見える次のような記載を踏まえたものである。「漢の武帝の時代、武帝が東方朔に、昆明池の底から出てきた灰の由来を聞いたが、判らなかつた。しかし高僧の法蘭に由れば、それは世界の終末に劫火が焼き尽くした時の灰なのである、という。「江淹にとって、この様に仏典に説かれる世界もまた、汲冢書に於ける『穆天子伝』の世界と同様に、「モノ」の出土によつ

て、現実のものとして証明される性質のものであった。この点、江淹は道教であれ仏教であれ拘泥しない。

このように、後半生の江淹の心をとらえたのは、「史伝」や、いかに奇異であっても、現実に存在する事物によって、往古や域外の世界が立証されるという現象、すなわち、郭璞が語った「精驗潛效、絶代懸符（まぎれもない証拠が現れ、時代を経て遙かに符号する）」（郭璞『注山海経序』）ことの喜びだったのではないかと思えるのである。こうした喜びに支えられつつ、江淹が志した『山海経』の補欠とは、既知の情報を一つ一つ積み重ね、茫漠たる未知の時空に対して確実な時空を押し広げてゆく作業だったのではないだろうか。

結語

漢と唐という巨大帝国に挟まれた六朝という時代は、北方胡族との戦いに破れた漢族が、南方の地に閉じこめられた四百年であった。この閉ざされた南方の地に短命の王朝が目まぐるしく交代し、帝位を巡る凄惨な争いが繰り返された六朝宋齊梁という時代にあつて、江淹が、確実にこの世に繋がるものとして『山海経』の広大な時空の実証作業に専心したのは、あるいは、自らが身を置いた現実世界を覆う閉塞感ゆえであつたのかも知れない。

しかし同じ六朝期にあつても、『山海経』の世界に何を託し、求めたのかについては、詩人によって様々なスタンスがあつた。江淹以前に、『山海経』を文学の素材とした作品には、郭璞『山海経図讚』と共に、陶淵明「読山海経」が著名である。興膳宏氏は、両者を比較し、『山海経』の世界を事実として実感するのは陶淵明の態度ではないとし、「郭璞は、「注釈」によつて、陶淵明は「詩」によつてその関心を示すというのも、二人の『山海経』世界への態度の

違いを象徴する」と述べている（一九六四）⁵⁹。この指摘を江淹の『赤梟経』編纂事業まで敷衍するとすれば、江淹が『山海経』の闕を補う」という目的で『赤梟経』を編纂せんとした態度は、『山海経図讚』のような文学作品に留まらず「注釈」という行為によって『山海経』世界に関わった郭璞の態度により近いと言えよう。

郭璞は『注山海経序』で、「夏后の事蹟」、「八荒の事」を後世に伝える、という『山海経』注釈の意義を唱えたあと、⁶⁰ 末尾をこう締めくくっている。

非天下之至通、難與言『山海』之義矣。嗚呼！達觀博物之客、其鑒之哉。

【訳】天下の賢者でなければ、『山海』の深義を共に語る事は難しい。ああ！博学達識の客よ、よくよく鑑みられん事を！

郭璞『注山海経序』

郭璞が非業の死を遂げてから百二十年後、この呼びかけを受け止めたのが、江淹であった。『山海経』のように本草医薬、神話、地理等、多彩な内容を持つ書物の補欠は、恐らく「齊史」「十志」を著してその才を示した（『史通』「古今正史」）江淹のような、博学多才の人物によってこそ、初めて可能だったに違いない。そうした始められた『山海経』の「闕を補う」作業は、郭璞注を熟読、検討することの絶えざる繰り返しであったろう。

“五色の筆”は、実は、郭璞に返される事無く、後半生に至り、前半生とは違った形で用いられたのではないだろうか。

1 鍾嶸『詩品』「中品」「梁光祿江淹詩」「初、淹罷宣城郡、遂宿冶亭、夢一美丈夫。自稱郭璞。謂淹曰、「吾有筆在卿處多年矣、可以見還。」淹探懷中、得五色筆以授之。爾後爲詩、不復成語、故世傳江淹才盡。」（上海古籍出版社一九九六）

2 高橋和巳「江淹の文学」、『吉川博士退休記念中国文学論集』筑摩書房一九六八）、曹道衡「江淹的擬古詩及其他」、『中国古

典文学論叢（第一輯）一九八四）

3 『南史』江淹傳「凡所著述、自撰爲前後集、并齊史十志、並行於世。嘗欲爲赤縣經、以補山海之闕、竟不成」（中華書局一九九七）×傍点は筆者。以下同じ、

4 明胡之驥『江文通集彙注』凡例「八、『南史』曰、淹嘗欲爲『赤縣經』以補『山海』之闕、竟不成。余按、宣城刻拾遺『遂古篇』、亦彷彿『山經』之義、今收入詳註之。」（中華書局一九八二）、同書所収「遂古篇」胡之驥評「南史曰、淹嘗欲爲『赤縣經』、以補『山海』之闕、竟不成。驥按、遂古篇、大略彷彿耳。」

ここで胡之驥の謂う「宣城刻」とは、「凡例」で胡之驥自ら触れる「宣城梅刻」、則ち「梅鼎祚本」の事。『江文通集彙注』は、萬曆二六（一五九八）、明の胡之驥が梅鼎祚刻本を底本とし、明の汪子賢輯本『漢魏諸名家集』、『江文通集』を加えて校訂し加注したもの。本稿では、中華書局本『江文通集彙注』（李長路ら校点、中華書局一九八一、以下『彙注』）を用いたが、『彙注』本には明示されない注釈の典拠については、『江淹集校注』（愈紹初・張亞新、中州古籍出版社一九九四、以下『校注』）に多くを拠った。年譜については、『六朝作家年譜輯要』下冊・愈紹初「江淹年譜」（黑竜江教育出版社一九九九）及び蕭合姿『江淹及其作品研究』第二章附「江淹年表（附作品繫年）」（文津出版社二〇〇一）を参照した。

5 『史記』「大宛傳」論讚「太史公曰、…今自張騫使大夏之後也、窮河源、惡睹本紀所謂崑崙者乎。故言九州山川、尚書近之矣。至禹本紀、山海經所有怪物、余不敢言之也。」（中華書局一九八二）

6 郭璞『注山海經序』世之覽『山海經』者、皆以其闕誕迂誇、多奇怪俶儻之言、莫不疑焉。試論之曰、莊生有云、「人之所知、莫若其所不知。」吾於『山海經』見之矣。…司馬遷敘『大宛傳』亦云、「自張騫使大夏之後、窮河源、惡覩所謂崑崙命者乎？至『禹本紀』、『山海經』所有怪物、余不敢言也。」不亦悲乎！」（袁珂『山海經校注』巴蜀書社一九九六）、興膳宏氏もまた、郭璞が『山海經』を事実の記録として認識していた事を指摘する。（興膳宏「詩人としての郭璞」『中国文学報』一九・一九六四、同氏「乱世を生きる詩人たち」『研文出版二〇〇一 一所収』）

江淹「遂古篇」について

- 7 脚注六、興膳論文（一九六四）、黒田真美子「江淹の叙景表現について その色彩を中心として」（『お茶の水女子大学中国文学会報』二十・二一）
- 8 拙稿「江淹「五色の筆」新考 『山海經』・郭璞の系譜から」（『中国詩文論叢』二二・二一）
- 9 郭璞『注山海經序』「案『史記』説穆王得盜驪耳驂之驥、使造父御之、以西巡狩、見西王母、樂而忘歸、亦與『竹書』同。『左傳』曰、「穆王欲肆其心、使天下皆有車轍馬跡焉。」「竹書』所載、則是其事也。（略）若『竹書』不潛出於千載、以作徵於今日者、則『山海』之言、其幾乎廢矣。」
- 10 『晉書』「郭璞」「璞好經術、博學有高才（略）。好古文奇字、妙於陰陽算曆。」（『中華書局一九九六』）
- 11 郭璞『山海經圖讚』「中山經」「赤銅」「昆吾之山、名銅所在。切玉如泥、火炎其采。尸子所歎、驗之汲宰。」（『嚴可均』全上古三代秦漢三國六朝文』中華書局一九九五）
- 12 江淹「赤虹賦」視鱸岫之吐翕、看鼇梁之交積」（『竹書紀年』下、周穆王三十七年、伐越、大起九師、東至于九江、叱鼇、廢以為梁。）、清思詩五首：第二首「白雲、瑶池、曲、上使淚淫淫」（『穆天子傳』卷三、天子觴西王母于瑶池上。西王母為天子謠曰：「白雲在天、山陵自出。道理悠遠、山川間之。」「恨賦」方架鼇、鼇以為梁、巡海右以送日」（『竹書紀年』下・同上）、『雲山讚四首：白雲畫讚』蕭瑟玉池上、容裔帝臺前」（『穆天子傳』卷三・同上）、采菱「乘鼇非逐俗、駕鯉乃懷仙」（『竹書紀年』下・同上）等。
- 13 『南史』「江淹傳」「永明三年、兼尚書左丞。時襄陽人開古冢、得玉鏡及竹簡古書、字不可識。王僧虔善識字體、亦不能讀、直云似是科斗書。淹以科斗字推之、則周宣王之前也。簡殆如新。」
- 14 江淹「銅劍讚」永明初、始造舊宮。鑿東北之地、皆平岡迤隴、尤多古冢墓。有人得銅劍、長尺五寸、余既借看、歎其古異。客有謂余曰：「古時乃以銅為兵乎？其可得而聞不？」余笑而應曰：「此證據甚多、殆不俟言。卿既欲知、輒具言之。余按『山海經』曰：「昆吾之山、其上多赤銅。」「郭璞註曰：「此山出金如火、以之切玉、如割泥也。」「周穆王時、西戎獻之、尸子所為昆吾之劍也。」「越絶書』曰：「赤堦之山、破而出錫。若邪之谿、涸而出銅。歐冶鑄以為鈍鉤之劍。」「又汲冢中、得一銅劍、長三尺五、乃今

所記干將者、亦皆非鐵也、明古者以銅錫爲兵器也。『周書』稱穆王時、征犬戎、得昆吾之劍。火浣布、長尺有咫。又有煉銅赤刀、割玉如泥焉。(略)』

15 江淹「銅劍讚」昔余爲吳興令、鑿池又獲銅箭鏃數十枚。時有人復於彼山中伐木、得銅斧一口。古銅鑄爲兵、豈爲一據？故備言其詳、以發子之蒙矣。」

16 『江文通集』「自序」「淹字文通、濟陽考城人(略)所誦詠者、蓋二十萬言。而愛奇尚異、深沉有遠識、常慕司馬長卿、梁伯鸞之徒、然未能悉行也。」

17 「晉書」王隱傳「太興初、典章稍備、乃召隱及郭璞、俱爲著作郎、令撰晉史。」他。

18 『梁書』江淹傳「凡所著述百餘篇、自撰爲前後集、并齊史十志、并行於世。」(中華書局一九九五)

19 劉知幾『史通』「古今正史」「齊史、江淹始受詔著述、以爲史之所難、無出於志、故先著十志、以見其才。沈約復著齊紀二十篇。梁天監中、大尉錄事蕭子顯啓撰齊史。」(浦起龍釋『史通通釈』上海古籍出版社一九八七)

20 『後漢書』蔡邕傳「に、收付延尉治積、邕陳辭謝、乞鯨首刖足、繼成漢史」とあるのにより、仮に『漢史』に比定する。また『史通』「古今逸史」には、「而(蔡)邕別作朝會、車服二志。」といい、「朝會志」「輿服志」を編纂したとあるので、江淹はこれを参照したものとみて良からう。

21 王琳「六朝辭賦史」第五章「南朝賦」第五節「写景抒情賦巨子・江淹」(黑竜江教育出版社一九八八)、蕭合姿『江淹及其作品研究』第三章「江淹詩歌研究」、文津出版社一

22 石本道明「江淹「遂古篇」と楚辭「天問」について 本文解読とその比較」、『國學院大學紀要』四二・二 四

23 中野将「江淹集の變遷」(『中国古典研究』三三・一九八八)

24 本稿では、中野氏の論考に従って、江淹の前後自撰集を『江淹集』と総称する。(江淹の自撰集を『江淹集』と称するのは『隋書経籍志』の記載が最古の例。)

江淹「遂古篇」について

- 25 『南齊書』「檀超傳」建元二年、初置史官、以超與驃騎記室江淹史職。」(中華書局一九九七)、『梁書』「江淹傳」建元初、又爲驃騎豫章王記室、帶東武令、參掌詔冊、并典國史。(略)永明初、遷驃騎將軍、掌國史。」、『江文通集』「自序」受禪之後、又爲驃騎豫章王記室參軍、鎮東武令、參掌詔冊、並典國史。」(括弧内西曆年・筆者加筆)
- 26 「遂古篇」第一段落到記載の神や地名のうち、『山海經』と重なるのは次の通り。「女媧」(大荒西經)、「共工」(海内經)、「不周山」(西山經)、「河洛」(大荒東經)、「蚩尤」(大荒南經)、「羿」(海内經)、「夏開」(大荒西經・海内南經)、「夸父」(海外北經)、「尋木」(海外北經)、「穆王」(注山海經敘)、「王母」(青鳥)、「西山經他」(崑崙墟)、「海内西經」(このうち「楚辭」「天問」にも記載される神は、「女媧」「羿」「夏后啓」「穆王」)、『山海經』中に記載されないのは、「女岐」(天問)、「常娥」(『淮南子』)、「覽冥」(『豐隆』)、「楚辭」「離騷」(『傳説』)、「莊子」(『大宗師篇』)のみである。このように、所載する神々・国名の点からみても、「遂古篇」は『山海經』的色彩が濃厚であると言える。
- 27 郭璞はまた「長臂」「両面」などの註を明らかに『東夷傳』に拠っているにもかかわらず、その出典を明記しない。こうした注釈の不徹底さは、黄侃に「襲舊而不明舉」と指摘されるような郭璞注の欠点であり(黄侃『論学雜著』所載「爾雅」についての論。郭璞注の不備に対する黄侃の言については、桜井龍彦「郭璞『山海經』注の態度(上下)」、『中京大学教養論叢』三四 四・三五 一 にすでに指摘される)、江淹に『山海經』補欠作業を促した要因とも見なせよう。
- 28 例えば郭璞『山海經圖讚』では「三身一臂國」の人を讚じ、「品物流形、以散混沌。増不爲多、減不爲損。厥變難原、請尋其本。」という。
- 29 劉歆『山海經敘録』孝武皇帝時嘗有獻異鳥者、食之百物、所不胃、肯、食。東方朔見之、言其鳥名、又言所當食、如朔言。問朔何以知之、即「山海經」所出也。」(袁珂『山海經校注』巴蜀書社一九九六)
- 30 劉歆『山海經敘録』孝宣帝時、擊磻石於上郡、陷得石室、其中有反縛盜械人。時臣秀父向爲諫議大夫、言此貳負之臣也。詔問何以知之、亦以「山海經」對。其文曰、「貳負殺竄窳。帝乃梏之疏屬之山、桎其右足、反縛兩手。」上大驚。朝士由是多奇「山

海經』者、文學大儒皆讀學、以爲奇可以考禎祥變怪之物、見遠國異人之謠俗。」

31 郭璞『注山海經序』「世之所謂異、未知其所以異、世之所謂不異、未知其所以不異。何者？物不自異、待我而後異、異果在我、非物異也。（略）夫、翫所習見、而奇所希聞、此人情之常蔽也。」

32 郭璞が「侏儒國」を「黒齒國」の注に記載しないのは、或いは『山海經』に、同じ「こびとの国」で「侏儒」との音通である「焦饒國」（海外南經）、「周僂國」（海外南經）といった国の記載があるためかも知れないが、江淹がそれらを継承せずに「東夷傳」の記述を以て補つのは、焦饒國「周僂國」の郭注に引くのが史書ではなく主に緯書である事にも因るであろう（附表 参照）。

33 「遂古篇」の「倭國」 黒齒「裸民」 侏儒「という描写順が史書や郭璞注と違つのは、「身shen」「民min」「隣lin」という押韻を優先させたためだろう。」

34 西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』第二章「東アジア世界と冊封体制 六〜八世紀の東アジア」（東京大学出版会一九八三）参照。

35 『宋書』「夷蠻・倭國」「太祖元嘉二十年（四四三）、倭國王濟遣使奉獻、復以爲安東將軍、倭國王。（略）順帝昇明二年（四七八）、遣使上表曰（略）詔除武使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王。」（中華書局一九九七）

36 『南齊書』「東南夷・倭國」「建元元年（四七九）、進新除使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓（慕韓）六國諸軍事、安東大將軍、倭王武號爲鎮東大將軍。」（中華書局一九九三）『梁書』「東夷・倭」「齊建元中（四七九）、除武使持節、督倭新羅任那加羅秦韓六國諸軍事、鎮東大將軍。高祖即位（五一）、進武號征東大將軍」「南史」「夷貊下・倭國」「齊建元中（四七九）、除武使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓六國諸軍事、鎮東將軍。梁武帝即位（五一）、進號征東將軍。」

37 江淹は国史編纂と同時期に多くの詔冊作製を行っており、例えば、交州に対する恩赦の詔「賜赦交州詔」や、北魏軍征伐の際の「北伐詔」など、異民族に向けて作られた詔冊も少なくない。この様に、後半生の江淹が、実際に異民族の住む空間に對峙する職にあつた事は、「遂古篇」の域外の觀念を考える上でも看過出来ない。

38 江淹「赤虹賦」俄而、赤蜺電出、螭虬神驤。：雖圖緯之有載、曠世識而未逢。江淹「蕭上銅鐘芝草衆瑞表」瑶光日闡、玉繩永休（『春秋元命包』「玉衡北兩星、爲玉繩」）、江淹「蕭讓太傅相國齊公十郡九錫表・第二表」竊謂祿爲十郡、必俟禹迹之勤（『春秋題詞』「禹跡茫茫、畫爲九州」）他。

39 郭璞は「海外南經」「貫匈國」の記述に対して、「貫胸」「深目」「長股」が黃帝の御代に徳を慕って入貢した」という『尸子』の伝を用いるが（附表）、「遂古篇」第四段落の「四海の外」に続く「窮隆溟海、又有民兮」の記述の冒頭で、江淹は「長股・深目は、どうして君の臣下と言えようか。」と述べ、郭璞注を暗に否定する。また、郭璞は「東夷伝」所載の沃沮東海中に住む「長袖の民」に比定する。「長臂」が二丈（『箋疏』は「三丈」と注す）もの長さの臂を持つ事から類推して、「海外西経」の「長股」もまた三丈もの長さの足を持つものと解し、「長股」の實在をも認めているが、他方、江淹「遂古篇」では、史書に見えない「長股」については、「長臂」「両面」等の「四海の外」の奇国とはきっぱりと区別して、さらにその外「窮隆溟海」の民として記述する（附表）。

40 『魏略』は裴松之が最も多く補註する逸史で、唐の劉知幾『史通』には正史に列せられる。

41 脚注八参照。江淹作品に見える鑛物愛好は已に「銅劍贊」に確認したが、このほか「空青賦」「丹砂可学賦」「扇上綵畫賦」など、他には類例のない多くの風変わりな鑛物詩賦を残している。

42 『後漢書』「西域傳」「班超遣掾甘英窮臨西海而還。皆前世所不至、山經所未詳、莫不備其風土、傳其珍怪焉。」

43 長沢和俊氏は、四世紀から五世紀にかけての中原王朝の西域進出は、三三六年前涼王張駿の高昌郡設置（三八二—三八三年の前秦の將軍呂光の龜茲遠征（四四三—四四八年の北魏の万度帰の西征の三度のみであり、しかも一過性のものであったという。）（同氏『シルクロード』講談社学術文庫一九九三、一六八頁）参照

44 高橋和巳氏（一九六八）が、江淹文学に見る玄学志向や神仙道家への憧憬を説き、蕭合姿氏（二一）も三教からの影響を指摘しつつ、「此種釈道思想在文通詩中極為常見、尤以道家思想最為常見。」（第三節・江淹思想與交遊（四三頁）と道家的

思想が濃厚であると述べている様に、道家道教を江淹の思想として重視する説は少なくない。

45 錢志熙「江淹、才盡、原因新探」、『電大教学』一九九二年第四、五期。

46 『春秋』莊公七年「夏四月辛卯、夜、恒星不見。夜中、星隕如雨。」左傳「夜明也。」

47 支謙『太子瑞應本起經』。到四月八日夜明星出時、化從右脇從生墮地、即行七步。舉右手住而言、天上天下、唯我為尊。……是時、天地大動、宮中盡明。」（『大正大藏經』第二卷「本緣部」Z185）

48 沈約「答陶隱居」難「均聖論」引陶弘景「難鎮軍 均聖論」の要約文として 難云：釈迦之現、近在莊王、唐・虞・夏・殷、何必已有？周公不言、恐由來出、非閑宜隱。……（『沈約集校箋』浙江古籍出版社一九九五）とある。

49 沈約「答陶隱居」難「均聖論」答曰； 釋迦出世、年月不可得知、佛經既無年曆注記、此法又未東流、何以得知是周莊之時？不過以「春秋」魯莊七年四月辛卯、恒星不見為據、三代年既不同、不知外國用何曆法？何因知魯莊之四月、是外國之四月乎？若外國用周正耶、則四月辛卯長曆推是五日、了非八日。若用殷正耶、周之四月、殷之三月。用夏正耶、周之四月、夏之二月。都不與佛家四月八日同也。若以魯之四月為証、則日月參差、不可為定。若不以此為証、則佛生年月、無証可尋。且釋迦初誕、唯空中自明、不云星辰不見也。瑞相又有日月星辰停住不行。又云明星出時、墮地行七步、初無星辰不現之語、與「春秋」恒星不現、意趣乖。」（ 筆者加筆、）

50 今、この「恒星不見」を中心とする沈約と陶弘景の一連の議論は、唐の道宣（五九六 六六七）『廣弘明集』卷五「辯惑篇」に採録されるが、同書卷三の「歸正論」に江淹「遂古篇」が所載されている。

51 前掲脚注四、『六朝作家年譜輯要』羅國威「沈約任昉年譜」（上冊）・羅國威「華陽隱居陶宏景年譜」（下冊）、及び脚注四十七、『沈約集校箋』附「沈約事迹詩文系年」参照。

52 袁珂『山海經校注』では、「天壽疑別有意義、郭以為即天竺國、天竺在西域、漢明帝遣使迎佛骨之地、此未知是非也。」という王崇慶の評語を引き、「珂案」として「天竺即今印度、在我国西南、此天壽則在東北、方位迥異、故王氏乃有此疑。或者中

江淹「遂古篇」について

有脱文譌字、未可知也。」と述べている。

53 『山海經』「海内經」東海之内、北海之隅、有國名曰朝鮮、天毒。其人水居、佷人愛人。」郭璞注「天毒、即天竺國、貴道德、有文書、金銀、錢貨、浮屠出此國中。晉大興四年、天竺王獻珍寶。佷、亦愛、音隱隈。」

54 『山海經』「西山經」西南四百里、曰昆侖之丘、是實惟帝之下都、神陸吾司之。…有木焉、名曰沙棠。可以禦水。…河水…赤水…洋水…黑水…海内西經」海内昆侖之虛、在西北、帝之下都。昆侖之虛、方八百里、高萬仞。上有木禾、長五尋、大五圍。面有九井、以爲玉井檻。面有九門、門有開明獸守之、百神之所在。在八隅之巖、赤水之際。…大荒西經」西海之南、流沙之濱、赤水之後、黑水之前、有大山、名曰昆侖之丘。有神人面虎身、有文有尾、皆白、處之。其下有弱水之淵環之。…有人、戴勝、虎齒、有豹尾、穴處、名曰西王母。此山萬物盡有。」

55 「崑崙」と仏教的宇宙山の混交化は、既に東晋に始まっており、例えば、慧遠の師である道安は「崑崙」を「阿耨達丈山」に準えているが、郭璞はこうした仏教的解釈は一顧だにしないのである。（晋道安『釋氏西域記』阿耨達丈山其上有大淵水、宮殿樓觀甚大焉。山即崑崙山也。）また、郭璞における崑崙については、拙稿「崑崙と水 郭璞『山海經』図讚」「崑崙丘」にみる水の宇宙」松浦友久博士追悼記念・中国古典文学論集』二 六）に詳述した。

56 『史記』「趙世家第十三」「造父幸於周繆王。造父取驥之乘匹、與桃林盜驪、驊騮、綠耳、獻之繆王。繆王使造父御、西巡狩、見西王母、樂之忘歸。」

57 魯迅『中国小説史略』「神話与伝説」『山海經』所伝十八卷…其最世間所知、常引故実、有昆侖与西王母。」

58 慧皎『高僧傳』卷一「竺法蘭」又昔漢武穿昆明池、底得黑灰、以問東方朔。朔云不委、可問西域人。後法蘭既至、衆人追以問之。蘭云、世界終盡劫火洞燃、此灰是也。」（『大正大藏經』第五十卷「史傳部二」No.11 五九）

59 前載脚注六参照。

60 郭璞『注山海經序』「庶幾令逸文不墜於世、奇言不絶於今。夏后之跡、靡茷於將來、八荒之事、有聞於後裔、不亦可乎。」

【附記一】 本小論は、日本中国学会第五十六回大会での口頭発表に基づき補筆訂正したものである。諸先生方より貴重な御教示を賜ったことを、ここに感謝申し上げます。

【附記二】 本小論は、文部科学省科学研究費（特別研究員奨励費）の交付を受けた研究成果の一部である。